

登校拒否児と学級担任の対応

小池 省吾 品田 博道
山岸 宏 二戸 敏夫

当教育センターで受理した教育相談では、ここ数年登校拒否が高い割合を占めている。相談事例を通して見ると、登校拒否の原因はいろいろ考えられるが、登校拒否児が立ち直っていく過程で学級担任のかかわり方が重要な鍵となっていると思われる。

この報告では、登校拒否の子供を目の前にした学級担任が、その子供をどう理解し、その子供にどう対応していったらよいかを相談事例に基づいて探ってみた。

I はじめに

新潟県教育委員会の調査によると、昭和60年度における長期欠席者に対する「学校ぎらい」の占める割合は、小学校で31.9%，中学校で69.8%である。前年度に比べ小学校では9.1ポイント，中学校では0.4ポイント増加している。また、1,000名を越える高校の年間退学者の中で、いわゆる「登校拒否」の生徒が少なくないと報告している。このような現状から登校拒否に対する対応と指導が大きな課題になってくる。

登校拒否児童・生徒を抱える担任は、何とか子供を立ち直らせ、登校させようと努力する。それにもかかわらず、子供はすぐには登校できない。時には登校しかけたかと思うと、再び登校できなくなり、休みが長期化してしまうことが多い。このように、登校拒否児の指導が難しいのはなぜであろうか。それは、子供の人格がどのように形成されるかによって、性格や情緒の安定が図られるためである。それだけに、子供に対する担任のかかわり方、担任と家族との連携や協力、場合によっては関係機関等との連携が重要になってくる。このことを充分に理解しながら担任は対応を進めているのであるが、実際には早期の登校につながらない。

そこで、本研究では相談事例をもとに、学級担任や学校のよりよい対応のあり方を探ってみることにする。研究に当たっては、担任の対応が登校拒否児やその親にどう受けとめられていくか、学級や学校の対応が登校拒否児や親にどのような影響を与えていくかなどに焦点をあて、対応がよい結果になった事例と逆の事例を比較する方法をとった。

登校拒否児の対応に当たって重要なことは、一つにその登校拒否が今どのような状態であるかを推察することであり、二つには登校拒否がどのような過程をたどってきたのか検討することである。対応の具体的事例を述べる前に、まずこの二点について基本的な考え方と研究の方向を述べておきたい。

第一章 登校拒否をどうとらえるか

I 「登校拒否」とは

登校拒否で休んでいる子供の生活や行動を見ると、我がままや怠けで休んでいるように見受けられる。確かにそういう状態や要素があるが、それだけで登校拒否をとらえると問題の本質を見落とし、誤った対応によって子供はますます混乱することになる。

一口に登校拒否といっても、原因やそこに至る心理機制はさまざまであり、発症経過や症状の発展段階、自我の発達、症状形成要因などいろいろな観点からのとらえ方がある。小泉英二は、登校拒否を広義にとらえ、以下の6つのタイプに分類している。

- ① 神経症的登校拒否（従来、学校恐怖症とよばれたものを含む）
優等生の息切れ型で、親からの心理的独立の挫折、自己内の葛藤に起因するものが多いAタイプ、甘やかされ型で、社会的情緒的に未成熟で困難や失敗を避けて安全な家庭内に逃避するBタイプの2種類に分けられる。これらを狭義の「登校拒否」と考える。
- ② 精神障害によるもの
精神分裂病、うつ病、神経症などの発症の結果登校拒否を起こすもの。
- ③ 怠学傾向
学習意欲に乏しく、時折り休み、教師や親に言われて登校するが長続きしない「無気力傾向」と、家庭や学校に適応できず、非行グループに入り学校にこない「非行傾向」がある。
- ④ 積極的、意図的登校拒否
学校に行く意味を認めず、自分の好きな方向を選んで学校を離脱する。
- ⑤ 一過性の登校拒否
転校・病気その他客観的に明らかな原因があり、それが解消すると登校するようになるもの

これらの分類によれば、登校拒否が明確にとらえられるように思われるが、実際にはいろいろな条件が複雑に絡み合い、判断しにくい事例が少なくない。また、最近は特に、上記の①と③の合併した様相を呈する事例が多い。しかし、いくつかの相談事例を見ると、両者には次のような傾向の違いがある。

表1 神経症的登校拒否と怠学傾向の登校拒否との比較 ◎はそのタイプの特徴的事項

	欠席のようす	欠 席 の 理 由 (き っ か け)	本人の性格、特徴	両 親 の 養 育 態 度
優等性の息切れ型 (Aタイプ)	・継続的 (急性的) ◎欠席を気にしている	・頭痛、腹痛などの身体的症状 ・友人とのトラブル ◎学校での失敗	・神経質、過敏 ・社会性が乏しい ◎要求水準が高い ◎自己顕示的	・父親 放任、無関心 盲従、優柔不断 ◎母親 期待過剰、過干渉 支配的溺愛
甘やかされ型 (Bタイプ)	・断続的 (慢性的) ◎時には登校できる	・頭痛、腹痛など ・学習のつまずき ◎クラブ活動でのトラブル(対人関係等)	◎消極的 ・内向性 ・社会性が乏しい ◎劣等感がある	・父親 放任、無関心 盲従、優柔不断 ◎母親 放任 盲従的溺愛
怠学傾向のもの	・断続的 (慢性的) ◎神経症的傾向少なし	・頭痛、腹痛など ・友人関係のトラブル ◎学業不振	・消極的 ◎無気力 ◎怠情 ◎うそをいう	・父親 放任、無関心 叱責、体罰 ◎母親 放任、盲従

いずれにせよ、「客観的に欠席の理由が十分に認められないにもかかわらず、心理的理由で学校へ行きたがらなかったり、行きたくても行けないで欠席する状態」を「登校拒否」と考える。本研究では、小泉がいう「神経症的登校拒否」を対象する。

Ⅱ 登校拒否の経過

登校拒否の状況や経過をくわしく検討し、判断することは、登校拒否児と親に対する担任、学校の対応を考えていく上で重要なことである。同じ神経症的登校拒否であっても、子供の性格、養育の経過、発達段階、交友関係や家族の人間関係などによって状態や経過が違ってくる。攻撃的な子供もいれば、全くそれを示さないで再登校する子供もいる。しかし、多くの事例を追ってみると、一般的に次のような状況と経過が見られる。

段 階	状 態
第1 初段 期階 の 理 心由 気づ 症け の・ 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ◦腹痛、頭痛、下痢、体がだるい、軽い発熱などの身体症状を訴え、継続的に欠席する。 ◦はっきりした症状がなく欠席することもある。 ◦月曜日によく休む。 ◦朝、だらだらと登校の準備に時間をかけ、登校時刻を遅らせる。 ◦トイレに入って、出て来ない。 ◦一日登校して2、3日休むという状態が目立つ。 ◦欠席の日数がふえてくると、いろいろな理由を捜す。 宿題をしてない、嫌いな教科がある、友達がいじめる、先生がこわいなどと次々に理由を変える。 ◦登校時刻が過ぎると元気になり、テレビを見たりプラモデルを作ったり、マンガを読んだりと自分の好きなことをして一日中、だらだらと過ごす。 ◦休んでいるときは、あまり外へ出たがらない。 ◦日曜日や休日は元気で外出したり、外で遊んだりする。
第2 攻段 撃階 的 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ◦登校を勧めると体が硬直し、動けなくなることがある。 ◦朝起こすと、布団にもぐり込む。 ◦朝、トイレに入って出てこない。 ◦自分の部屋に閉じこもる。 ◦親と一緒にでも外出しない。 ◦先生が訪問すると、逃げて会わない。友達が訪問しても会おうとしない。 ◦「〇〇を買ってくれば学校へ行く」といって、登校の代償を要求することもある。 ◦親や家族に乱暴したり、暴言をはいたりする。（両親を「おまえ」呼ばわりすることもある。） ◦物を壊したり、障子やガラスを割ったりもする。
第3 自段 閉階 的 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ◦口数が少なくなり、自分の中に閉じこもるようになる。 ◦就寝は明け方になることがあり、昼過ぎまで寝ている（昼と夜が逆転したような生活）。 ◦テレビを見たり、深夜放送を聞いたりして、無為な一日を過ごす。 ◦昼でも雨戸やカーテンを閉め、自分の部屋に閉じこもる。 ◦自分の部屋に鍵を掛け、家人を入れない。 ◦自分の部屋で一日中、好きなことをして過ごす（プラモデル作り、無線など）。 ◦散髪や入浴、また自分の部屋の整理や掃除をしないこともある。

	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 家人と一緒に食事をとらず、夜中に冷蔵庫から飲食物を取り出し、作って食べたりする。 ◦ 父親を避け、父親と顔を合わせないようにすることが多い。 ◦ 教科書等、学級に関するものには一切手を触れない。
第4回段階	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 身の周りの整理をしたり、散髪をしたりする。家の手伝いもするようになる。 ◦ 電話の応待をするようになる。 ◦ 訪問した友達に会えるようになる。 ◦ 学級の様子を自分から聞いたりする。 ◦ 両親との接触がうまくいくようになり、食事と一緒にできる。 ◦ 外出ができるようになる。 ◦ 新聞を丹念に読んだり、テレビのニュース番組を見たりと世の中の動きに関心を示す。 ◦ 段階的に登校したりすることもある。 ◦ 自分から友達に会ったり、担任に会ったりするようになる。（登校の機会をうかがう） ◦ 普通の生活のリズムに合わせて行動するようになる。

Ⅲ 登校拒否児にかかわる担任の課題

神経症的登校拒否の四段階における相談や援助のすすめ方の中で、次の3点が担任の対応の重要な柱になると考え、相談事例を絞ってみた。

(1) 初期の段階において登校拒否児に対する学級担任の対応

登校拒否児に対する初期の対応が、その後の経過の鍵になるといっても過言でない。担任が、登校拒否児に対してどのような態度や見方を持ってかわるか、また、その対応を子供や親はどのように受けとめていくかに焦点を当て様相をとらえ、対応について考察を進める。

(2) 中期において両親や関係機関と担任の対応

登校拒否状態が長期化してくると、親（家族も含める）の理解や協力がどうしても必要になってくる。また、場合によっては関係機関との協力や連携が効果を上げる。このようなとき、担任の対応が子供や親にどのように受けとめられていくのであろうか。担任が親や関係機関と望ましい連携・協力を進める方策とその背景について考察を進める。

(3) 後期における学級・学校と担任の対応

登校拒否児が再登校への兆しを見せ、回復つつあるとき、学級や学校の態勢が整っていなければならないことは論を待たない。それならば、よい態勢を作るために、担任はどう対応していけばよいか。対応の上でどのようなことが問題になるか。それらについて事例をもとに考察する。

登校拒否は、小学生、中学生、高校生と年齢が違えば問題状況や登校拒否のもつ意味が違い、担任や周囲の対応も違ってくる。したがって、本研究では校種別の事例を取り上げ、具体的な対応を探る。

第二章 登校拒否と学級担任

I 登校拒否児に対する学級担任の関わり

不登校を始めた初期の段階での担任のかかわりは、その効果を決定する重要な要因である。本節では、その初期の段階における取り組みとして、本人とのかかわりを中心とした事例を校種別にあげてみた。この時期での担任の対応としては、(1)家庭訪問による面接、(2)手紙や電話での対応、(3)級友への働きかけ等が主である。しかしその対応の仕方も担任によりまちまちである。本事例は、そうした担任の対応に対し、本人や親がどう感じどう受け止めたか、さらに気持ちがどう変化していくのかが観点である。

1. 事例

事例 1

子供の心の動きに応じてかかわった担任

（小学校5年生 A子）

(1) 本人とまわりの状況

A子は、学校では几張面で真面目、人が言うことにも反対することのないよい子である。素直で陽気な反面、家族に気に入らないことを言われると本を破るなど、物に気持ちをぶつける。気持ちが右から左へと大きく変わるところがある。友達が多いが親友は少ない。姉と父母、祖父母の6人家族である。

(2) 状況の概要

2月のスキー教室でA子は、忘れ物を取りに行ってみんなの所に戻ってみると、仲間がいなくなっていた。担任が困っているA子を見つけ、仲間の所に連れていく。翌日、A子は図書室で仲間に声をかけたが、返事がなかった。その後、A子は体の不調を訴え、断続的に不登校状態になる。1か月程した3月中頃より、全く登校しなくなる。母とは外出するが、“友達が怖い”と言って一人では外出したがない。家では、テレビやマンガ本を見て過ごすという毎日である。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

早期の家庭訪問

担任は、A子が友達との間にちょっとした行き違いがあったことを感じていたが、級友から特にいじめられているとは感じなかった。A子の不登校が断続的になったことに気付いた担任は、家庭訪問をし本人と直接会うことに努めた。最初、A子は何となく気まずそうであった。担任は無理にA子の心に入り込まないように心掛けた。さり気ない会話で、とにかく本人に会えることを第一に考えた。A子の話をきっかけに、担任はA子と遊びながら、言葉を交わした。そんなとき、A子はわずかに笑顔を見せるが登校への誘いは控えた。A子は、間もなく仲の良かった友達と仲直りができた。担任は、3月半ば頃までに、何回かA子の家に足を運んだ。A子は徐々に心の固さが消え、時には笑顔で担任を迎え入れた。担任と本人の会話が少しずつ、スムーズになっていった。しかし、3月半ばから、A子は担任を何となく避け、会わないようになった。A子の視線や表情から、A子の重い気持ちを感じと

った担任は訪問を少し控えたり、会う時間を短くするなど方針を変えた。

春休み中の学校での対面

A子は、土曜日、日曜日には母と外出したり、気の合う友達と遊ぶことがあるという話を担任は耳にしていた。春休みに入って、担任は学校への提出物を都合のよい日に持ってきてほしいとA子に伝えた。休んで誰もいない学校に近所の級友を連れてA子が訪れたのは、その2～3日後である。A子は、担任の手伝いをしたり、一緒にきた級友と遊んだりした。休んでいる子供とは思えない程元気に遊んだ。

登校始めの声かけ

新学期が始まって5日目A子は、放課後、近所の級友と学校を訪れ、1時間程、担任と話した。しかし、その後は1週間程、休む日が続いた。ある日、A子は母に連れられて車で登校した。しかし、A子は車から降りようとしな。担任は、車の中に入ってA子に「がんばってきたね。つらかったでしょう」と声をかけた。A子は、保健室でしばらく休む。その日は教室まで行かなかった。

担任は、そのような本人をかわいそうに思った。無理に登校をしても、A子自身が精神的に成長していかないかぎり、再び不登校に陥ることが予想される。担任は、A子が登園を嫌って抵抗して泣いたり小学校1年生の時に登校を嫌がったことがあるという話を聞いていた。A子と気持の交流を図り、A子の理解を深めていくことが今後の指導に大切であると考えた担任は、A子と日記の交換を始めた。

A子は、4月下旬から登校するようになった。

(4) 考 察

A子が家に籠りきりにならず、短い期間で登校することができたということからすると、不登校の早期における担任の対応が適切であったといえる。よい対応であったと思われるのは、次の二点である。

ア 子供の気持の理解と安定に努め、無理のない対応を心掛けたこと。

A子は、友達との行き違いから友達に不信を感じ、動揺していたと思われる。A子が心を閉ざしていたのは人への不信感、登校できないことの罪悪感、孤独感など複雑な感情があったためであろう。そのようなA子にとって、担任の穏やかでA子の気持を大事にして見守ってくれる対応が、暖かく感じられたにちがいない。担任に会う時のA子の気持は、いつも同じではない。それを見抜いて対応を変えた担任に、A子は楽な気持で会えるようになっていったのではないか。

イ 子供が抱える課題を考えて、焦らない指導を心がけたこと。

A子の不登校の誘因は、友達との行き違いであるが、A子が抱える課題の一つは対人関係を通じた自我の成長にある。担任は、A子の日頃の友達つき合いや性格からA子に見られる感情の起伏の大きさに問題があるように感じていた。A子の不登校は今に始まったことでないという担任の認識が、ゆとりをもった指導につながった。不登校の初期における問題の的確な認識が、重要であるといえる。

事例 2

転入後登校をしる児童と焦る担任

(小学校5年生 B子)

(1) 本人とまわりの状況

B子は、理解が早く人の気持を先回りして読み取る面がある。4月に転校してきた当初は、特に問題

もなく元気に過ごしていた。クラスの仲間にはやや生意気な子だと思われていたようだ。また、生活班の班長としてきびきびとした態度を示していた。

父は公務員で表面は穏やかでおおらかな面もあるが、自分がこうだと思えることはとことんやり抜いていく。母は理知的で、自分のあるべき姿をはっきりと持ちそれへの努力を惜しまない。妹（8歳）は細かいことにあまりこだわらない性格である。

(2) 状況の概要

5年生の4月に大阪から父の転勤によって転校してきた。初めのうちは、やや独善的な面はあったが頭は切れ、都会的なセンスを示すので級友からは“1目”置かれていた。それが5月に入って体育の授業や全校マラソン等で体を動かすことを嫌がるようになり、自分の気に入らないことがあるとツンとした態度を示し、級友も離れていった。その頃から体の不調を訴えたり、いろいろな理由をつけて遅刻を繰り返えし、欠席も増え、6月から全く登校できなくなった。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

わがママを許さないきびしい指導……担任への不信強まる 転校して1か月を過ぎた頃から学校生活に適應できない症状が現われてきた。級友となじめず、登校班に加わろうとしなくなった。担任としてこのまま認めていくとわがママを助長していくことになると思い危機感を抱き、励げましながらもきびしい指導を繰り返えし、時には打つこともあった。このためB子は担任に対して強い恐怖感を持つようになった。また、母親はB子に対してマラソンや体育等、本人がつらいということについては無理せず休んだらどうかと話していた。このことは担任の指導と対立することになり、双方に不信の溝を深めていった。

気持ちを捕らえようと模索する 担任は何とかなければと悩み、家庭訪問をしたり、母親に学校へ来てもらって話し合いを重ねると共に、全職員にもそのことを話し協力を要請した。その結果、先生方はB子の気持ちを引き立てようと意識的に声をかけるようになった。B子にとっては何で自分だけが先生方にちやほやされるのか非常に負担になっていった。

そこで担任はB子とのラポートを深めながら改善していこうと考え、いままでのことを本人と話し合い、なるべく自然に接触するようにした。その結果、B子の方からいろいろ話しかけてきたり、体にまつわりついて来ることさえあった。また、交換日記をしようという喜んでうなずき、自分の考えや、家での生活の様子を親しさを込めて書いてきた。このことはクラスの者には秘密にしておく約束であった。ところが、本人に直接手渡すことになっていたのに、翌日うっかりB子の机の中に入れておいてしまった。放課後、日直の児童がそれを見つけみんなの前で大きな声でそれを読みあげた。

B子は顔を真赤にしてぼう然としていた。その翌日から登校しなくなり2か月間全く家に閉じこもり、担任の訪問にも会おうとしない日が続いた。

(4) 考 察

大阪の学校から環境の全く異なる田舎の学校に転校して、本人、母親共に強い不安に陥り、まわりの人々と協調できずに自分の殻の中に逃避していったように見える。大阪の学校では、放課後等は比較的自由な時間を持つことができたが、新しい学校ではクラブ活動や体力づくり等が盛んで、今まで経験し

たことのない忙しい生活に組み込まれていくことが不適応症状の現われた原因と考えられる。

担任は何とか学校のリズムの中で生活していけるようにと熱心に取り組んでいった。それは相手を理解しようとする姿勢はとりながらも、教師の側からの教える論理が強く前面に出ていったようだ。そのことが本人はもとより、母親とも感情的な溝をつくっていくこととなった。

B子は感受性が鋭く、母親の心を素早く読み取り、母親の期待に沿うように生活していくことを習慣づけられていた。担任が注意するつもりで軽く打ったことが母子共に大きなショックとなり、母親が担任に不信感を持つようになり、B子が学校に行けない気持を増幅させたとも考えられる。

また、交換日記を通して心の通い合いも出て、B子も担任への信頼を回復するかに見えたが、うっかり約束を破ってしまった結果、立ち直ることが困難な程のショックを与えてしまうことになった。

このように、日常の教育活動の中で、教える側の論理として当然とか常識とかということで行動しがちであるが、その子供が今、どのような気持ちでいるのか、その子供の心を大切にする対応を忘れたときに、心を閉ざし、登校できない子供をつくっていく危険もあるのではないだろうか。

事例 3

嫌われながらも努力する担任

（中学校1年生 C子）

(1) 本人とまわりの状況

陽気で世話好きであるが時にはふさぎこんだり涙もろいところもある。また大げさで強情な面も見られる。両親、兄、妹、祖父母の7人家族であり、本人のしつけに対しては祖父母を中心に厳しかった。学校生活では自己中心的なところがあったが、担任に頼りにされたり級友からも親われていた。

(2) 状況の概要

1学期にいじめの対象になり4～5日学校を休む。2学期に入って座席換えがあり、いじめの対象になっていた子の席になり「友だちがいない」「話し相手がいない」などといって登校をしづり、学校に行っても体の具合が悪いとの理由で早退してくるようになる。現在、頭痛、腹痛、体がだるいなどの理由で10日間不登校が続いている。家では元気に過ごしているが、最近感情の起伏が烈しく反抗的でもある。「わたしはいなくなった方がいいようです。実際に死のうとしたんですから……」という内容の置手紙を残すが、本人はまもなく発見される。当教育センターへの来談はその翌日であった。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

いじめの対応をする担任

担任は、何回か家庭訪問しC子との面接を繰り返しているうちに、信頼関係も築かれ彼女自身の内面を聞くことができるようになった。しかしC子の「友だちがなくて寂しい」という気持を、担任はいじめられていると受け取り、学級的女子全員を放課後残し、いじめに対する指導をおこなった。翌日C子に学級の生徒から電話があり、「C子が学校を休んでいるのは“いじめ”のせいだと担任に説教された。だからC子が学校に来てくれないと私達は困るんだ。」と言われた。C子は自分の気持を考えずに学校に行かれないのを“いじめ”のせいにした担任を一遍に嫌いになり、「もう二度と担任には会いたくない」と泣いて母親に訴えた。事実、C子はその後担任には会わなかった。

担任はC子の急変に驚くと同時に、C子の気持を母親から聞かされがく然とした。担任は自校の教育

相談担当教諭に相談し今後の指導方針を次のように考えた。

- ア 本人に会えなくとも母親と面接し、母親を通して間接的に本人の気持ちを理解する。
- イ 学級の生徒に対しては早急に担任の誤解であったことを謝罪し、状況を説明し協力を得る。
- ウ 学級の生徒を訪問させ、C子とのコミュニケーションをはかる。

担任は本人に会えなくても母親との面接を実践した。学級の生徒の応援を得る準備もできた。担任のC子と思う素直な気持が、C子の母親や学級の生徒達の心を動かしたのである。特に学級の女子生徒とは何回も話し合いを重ね、信頼関係も深まり全員でC子のことを真剣に考えるようになった。C子の家へ訪問する係も決めようということになったが、全員が希望してしまい結局全員が交代で行くことになる。一方、担任と母親の面接も徐々に深まり、C子の気持ちも母親を通じて担任に伝わってきた。担任は「C子が『学校に行きたい』『友だちが欲しい』と言っていた」と母親に告げられた翌日、生徒のC子宅訪問を実施する。その3日後「学校に行く自信がついた」といってC子は登校をはじめた。

(4) 考 察

担任はC子の急激な変化に対して戸惑いを感じると同時に、1学期におこったC子に対するいじめ事件が強く心に残っており、思春期特有の心の葛藤に目を向けることができなかった。C子の自己中心的な考え方についていけず徐々にC子から離れていく学級の仲間に、C子は不安を抱くようになり、自ら逃避の道を選んでしまった。しかし担任のすばやい対応と真剣な取り組みが、わずか1か月半という短期間でC子を立ち直らせた事例である。教育相談担当に相談し、C子の気持ちにそって立てた3本の指導方針が鮮やかに的を射たのである。しかも、担任はいじめという判断の甘さからC子に完全に嫌われ、苦しい立場となるが、焦らず機が熟するまで待った忍耐と努力も見事であった。さらにこの事例をとおして担任と生徒、生徒相互の心の深まりが、学級に暖かい人間的な雰囲気を生じさせ、生徒一人一人が所属感を味わうことのできる学級に成長したことは、担任にとっても学級の生徒にとっても最高の収穫になったことであろう。

事例 4

一方的な激励に耐えきれなかった生徒

（中学校3年生 D男）

(1) 本人とまわりの状況

陽気で責任感が強く生徒会の役員で運動部の部長でもあるが、失敗を恐れたり、ささいな出来事に対して不安に陥りやすい面がある。両親と弟の3人家族であり、父親は温和な人柄で子供に対しても温かい気持ちで接しているが、父性に欠ける。兄弟の仲は良い。特に母親の飾り気のない明るさが家庭全体を明るくしている。しかし、D男に対しては必要以上に手をかけ過ぎてきたところがあり、本人も困難に対してすぐに母親に依存するところがある。

(2) 状況の概要

D男は運動部の部長として努力してきたが、部員達が自分に対して不信の念を持っているのではないかと思うようになり、自信をなくし不安定な状態に陥った。やがて頭痛、腹痛を訴え保健室で休養する回数が多くなり、時には早退するようになる。しかし、それも1週間と続かず頭痛、腹痛を理由にまっ

たく登校しなくなる。現在は友達とも会えなくなり、外に出れない状態である。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

再三再四の激励

頭痛や腹痛を訴え保健室での休養回数が増えたため、担任は怠けではないかと考え、両親を学校に呼び家庭でのしつけに対する指導をする。また本人に対しては、「部長なんだから」「生徒会の役員なんだから」という観点からもっとしっかりしなければと再三再四激励した。担任に指導された両親は、D男が部活の人間関係で悩んでいると知りながら「男なんだから小さい事にくよくよしないで元気を出して頑張れ」と励ますようになる。D男は心の葛藤をくり返しながら日々努力してきたが、無理解な激励に耐えきれず完全に登校を拒否してしまう。

登校刺激と医者への勧め

担任はなおも両親のしつけの甘さを指摘し、無理にでも登校させるよう強く指導していった。しかし逆にD男の頭痛、腹痛の訴えが強くなり、登校の時間が過ぎるまで自分の部屋から出てこなくなる。担任はD男の異常な訴えに対し病気ではないかと考え、両親に医者に診てもらおうよう要望する。両親はD男の同意を得て医師の診断を受けさせる。その後、結果がでるまでの間のD男は、ふさぎ込む日が多くなり不安定な状態が続いた。ところが異常なしという診断がでると急に明るく振る舞う。両親もホッと安どの胸をなで下ろす。

担任は「医師の診断の結果、異常がなかった」という母親からの連絡を受けるやいなや家庭訪問をし再び本人に強く登校を迫ると同時に、両親に対しても登校させるよう指導する。母親は様々な説得のしかたでD男に迫り「明日から学校に行く」と約束させる毎日が続いた。しかしD男の様子は悪化する一方であった。しびれをきらした担任は、出勤前に訪問し強引に車に乗せ登校させた。この時の様子を母親は、「担任のご努力には感謝しますが、ああまでしなくとも……。あの子がどんな気持ちだっただろうと思うと……」と声をつまらせながら担任のD男に対する思いやりのなさを訴えた。

結局、その日は2時間で帰宅し部屋に閉じこもってしまった。それ以来、担任を避けるようになり、訪問してくる学級の友達とも会わなくなった。両親はこの担任の態度から自らを反省し、「D男の気持ちにそって見守ってきたいのですが、いかがなものでしょうか」と当教育センターを訪れた。

(4) 考察

両親との数回の面接の結果、自信喪失を含む不安を中心とした情緒的な混乱による神経症的な登校拒否と考えられる。本事例における登校拒否の特徴として次の三点があげられる。

ア 本人の責務に耐えられず逃避するという不安に陥りやすい性格。

イ 母親の過保護な養育態度と父親の父性欠乏。

ウ 担任の本人に対する過度な期待と激励。

以上の三点を踏まえて、指導の方針や主たる指導方法の検討が必要であろう。頭痛、腹痛を訴え保健室での休養が多くなった時点での指導に疑問が残る。上記の本人の性格を十分理解できるなら、単なる過度な励ましではなく、本人の気持ちを理解し、その気持ちにそいながら接してやることが大切である。そしてそのことは、本人の不安を和らげ自分自身で解決していくための大きな援助となるのである。

次に登校刺激を強く与えてきた結果、本人の不安が増々強まり逃げ場のない状態に落とし入れてしまったことも問題である。登校刺激は本人の様子をしっかりと観察しながら与えなければならないし、駄

目と感じたときにはすぐにやめることである。登校刺激を与えたことにより本人に著しい変化が見えたときは、親も教師もいっさいの登校刺激をやめ、本人に安心して休むように話してやることが大切である。

事例 5

ゆれる気持を柔軟にとらえてくれた担任の指導

（高校2年生 F男）

(1) 本人とまわりの状況

F男の両親は、健在である。父は重い病気で入退院をくり返し、奇跡的に回復したがそれ以来単純な仕事しかできなくなり、現在他県で働いている。母は、ホテルで働き、その時間以外にも別の仕事をし、F男を養っている。2歳年上の姉は、高校を卒業後、他県に就職しており、休暇で帰省した時F男を何かと元気づけている。F男は、言葉使いや振る舞いにやや粗野な点はあるが、気持の優しいところがある。

F男の成績はよくないが、担任やクラスメートと協調していく社会性はある。

(2) 状況の概要

F男は、週に1日の欠席から、週に2～3日休むようになった。F男の欠席が目立つようになったのは、就職試験のために面接指導を受け、先生に「お前は、こんな態度で受かるわけじゃないか、ダメだね」と言われた頃からであった。母親は、F男に毎日登校するように言うが、始めは「ウン、ウン」と言っていたがしまいには、「うるさい！」と言っておこる。

母親は、1日家に居ないので、F男が卒業さえしてくれれば無理してでもF男のことを聞いてやる甘い面がある。次第にF男は生活のリズムを崩しだし、夜中から朝方まで読書し、登校時間に起きられないようになった。F男は、姉からの電話で「だいじょうぶ、今度帰ってくる時には登校しているよ」と言ったりしている。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

クラス全員そろって進級

担任は、クラス全員がそろって進級することに全勢力を傾けた。担任はF男の欠席が目立つまでは、F男の親から連絡のあることや電話でF男が家に居ることを確認して悪いことをしていなければ大丈夫だと安心していた。欠席が目立つようになり担任は慌てた。自分のクラスから留年者を出してはならないという思い、とにかく登校させることだけを第一に考えた。担任は、母親の勤めとの関係で、なかなか母親と会うことができないので、夜や、日曜日まで割いてF男と母親に会った。就職試験に失敗したことや社会の厳しさなどF男に話した。F男は「今の生活のリズムを変えなければならない。ジョギングでもしょうか……。」「先生は、俺のために時間を割いてくれて申し訳けない」とか、「休み明けに登校する」などと言った。

担任はF男のクラスメートにも電話をさせたり、家まで行かせた。生徒の話の中から担任が今まで知らなかったF男の気持がいろいろ解った。F男が中学生のとき、一家が近所から嫌われ、そこに住めないで、今のところに変ったこと、もし留年したら学校なんか辞めてしまうと考えていることなどF男の気持が解ったのである。

理屈よりF男の気持ちを

担任は、自分に対してF男が言っていることの他に登校しない理由があることを知った。クラス全員を進級させることは、勿論大切であるが、そのまえにF男が何を考えているのか、担任は知りたいと思った。先ずこの状態では、進級できないことをF男に伝えた。それから、ゆっくりと時間をかけて、登校するかしないかでなく、今F男がしたいことを聞いた。F男は、現在、母にねだって車を買ってもらおうとしていること、運転免許を取ろうとしていることなどが解った。

F男の選択を大切に

担任は、F男の気持ち、今やりたいこと、実際にしようとしていることなどから、F男が自分の将来について考えていることが解った。担任の気持ちを卒直にF男に話した。「俺は、おまえのしようとすることは解る。あとはF男が選択すればよいと思う。」と言った。ある程度、担任との関係が出来ていたF男は、その後悩み、選択をせまられている自分の立場を担任にさらに打ち明けた。

担任は、将来F男がもう一度学業を続けたいと思ったとき、現在の状況よりは厳しいこと、高校を卒業していないと職になかなかつけないこと等を話した。F男は、その後学校へ行きたいと友達にもらしていたと言うが、まだ登校していない。

(4) 考 察

この事例では、担任がF男の気持ちよりも先ずクラス全体を進級させるために、真剣になった。

F男は、担任の真剣さに感謝しながらも自分の気持はゆれていた。さらに担任は、自分が知っているF男の気持と、F男がクラスメートに話した気持との違いがあることに気づいた。担任は、じっくりF男の気持を聞いてみよう、そして最後はF男に選択させようと考えた。F男はいろいろ迷ったが、結局、自分で登校するかどうか選択しなければならないことを理解した。しかしまだF男の登校は始っていない。担任は、クラスの生徒全員を進級させたいと思う熱意だけではF男が変わらないことに気づき、F男の気持を聴きF男に選択させようとする柔軟さが必要であることを理解した。

事例 6**話をゆっくり聞いてもらえないで悩んでいる**

(高校1年生 E子)

(1) 本人とまわりの状況

父は健在、実母はE子が3歳のときに死んだ。E子が5歳のとき継母が家に入った。E子はその時から殆んど祖母に育てられた。父は会社員で非常に厳格である。父母、兄と異腹の弟、祖母の6人家族である。父は、あまりE子に関心を示さないようなところがあり、成績のことや、これからのE子の進路などについてあまり言わない。E子は、継母と弟をとくに憎んでいる。加えて祖母は、何かと継母の悪口をE子に言う。

(2) 状況の概要

学校では、あまり友人もいないが、クラスから浮き上がっている感じはない。1学期の成績はよくなかったが、頑張って成績を上げている。E子は2～3日登校しない日が1か月で3回あった。登校しない理由をE子は、通学に時間がかかるので学校を辞めたいと言う。E子は、朝早く起き、自分で弁当をつめ、登校していたが、最近夜遅くまで起きていて朝起きない。母が起こしに行くと、最初は返事もしないが、やがて「うるさい。出て行け」と怒鳴る。父親のまえでは、つとめておとなしくしているが、登

校しないことを言われると継母をうらむ。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

高校は義務教育でない 担任は、E子の欠席が目立ち始めてから、登校したE子に事情を聞いた。E子は、「別に何もありません……。」、「何も心配ないんです。ただ、通学に時間がかかる」と言うだけであった。担任は、E子に「高校は、勉強したい奴だけがあるんだ。理由もなく欠席したり、単位が取れなければ、進級も卒業も出来ない。……通学時間がかかるなんてことは、解ってたはずだ。我がままは通らない」と言った。中学校と高校の違いをこまごま説明し、明日から休まないようにとE子にきつく言った。さらに担任は、退学するんだったら中学と違うんだから、退学届をもってこいと言う。

良かれと思って言ったことが相手にどうとられるか その後E子の欠席は、続いた。担任は、父親を学校に呼んで事情をきいた。父親は、「E子が何も話してくれない、特別な育て方をしたわけでもないのに学校を辞めたいと言っている。自分のことは自分でするようにと何時も話している」と言う。「退学については考えていないので、どうか学校を続けさせてください」と言う。担任は、E子が勉強する気があるのなら休ませないで登校させてくださいと父親に話す。今の子供は、厳しさが足りないから「喝」を入れてやれば、良いんじゃないかと担任は考えた。

一度ゆっくり話を聞いてやる E子は、好きな教科の先生に手紙を出した。手紙の中に、「今どき、学校を辞めれば、職もないし、お嫁にも行けない最低、短大ぐらいは出たい」とか「通学に時間はかかるし、友達もあまりいない。教室はうるさいし、保健室へ行ってもさわがしくてゆっくりできない。さりとて家に帰りたくない」、「留年も嫌だし、退学も嫌、転校して別の学校へ行きたい」などとE子の気持が書いてあった。最後に、「誰もいないところで、ゆっくり私の話を聞いて下さい……担任には内緒にして欲しいと書いてあった。担任は、それをみせられ、家庭訪問をすることを決めた。まだE子は、登校していない。果して担任とうまく会えるだろうか。

(4) 考 察

E子と継母の間柄、父親とE子の心の交流のなさ、祖母の存在など複雑な問題が絡んでいる。しかし担任が良かれと思ってE子に言ったことが果してどうE子に受けとられていたのだろうか。E子は、「別に何もありません……」と言いながらも何か訴えている。E子自身は、自分の気持を聞いてもらうだけで気持がおさまる。手紙に「一度ゆっくり私の話を聞いて下さい……」とある。もう少し早い段階で担任は、家庭訪問してみる必要があった。

次に義務教育と高校教育は違うし、今の子供は一般に厳しさが足りない面もあり、担任の気持は否定しないが子供によって違う。E子のような生徒が最近多い。自分の気持をはっきり言えば、担任とてむげにこたわりはしないのに言わない。教師もある程度現代っ子に沿うよう感受性をみがいておく必要がある。

2. ま と め

子供たちが正常な発達をとげるために、それぞれの発達段階で着実に身につけておかなければならない課題がある。乳児期における信頼感、幼児期における依存から自立に向けての失敗や成功経験、小学校時代の興味や関心の高まりと好奇心から湧き出る活動性、中学生時代の自発性の獲得、そして高校生時代の自己同一性の確立。こうしたそれぞれの時代における発達課題の未成熟は、登校拒否の要因に大

きくかかわってくるのである。中・高校生の登校拒否児の要因が、乳児期や幼児期の発達課題の未成熟に起因している事例も少なくない。学級担任はこのような発達課題を理解すると同時に、登校拒否児の心理的背景を十分に考慮した対応が必要となる。

本人に対する対応のポイント

(1) 小学生の対応

この年代での登校拒否は母子分離不安の事例が多い。学校で何かいやなことがあったために一人で登校できないなど、発達課題の未成熟が原因になっている例が多い。本人の意識としては、小学校の低・中学年では、目の前のいやな状況に対して、不安や緊張を抱き、回避しようとするが、朝の登校時間を過ぎてしまえば、気が楽になって元気をとりもどす。登校を拒否していることへの罪悪感はあまり強くない。しかし、高学年になると、休んでいることへの罪の意識がやや強くなり、学校のことにふれられると口を閉ざしたり、外出が少なくなったりする。したがって次のような対応が望まれる。

ア まず家庭を通じて登校刺激を加えてもらう。

泣こうとわめこうと母親または父親に連れてきてもらう。何が原因だろうとか、神経症的傾向が強い子供かしらなどと考えためらう必要はない。最初が肝心である。1歩退くことが百歩退くことになる。

イ 家庭でだめなら学級担任が迎えに行く。

少なくとも1週間は足を運ぶ根気が大切。最初の1週間が勝負だ。早期であれば7～8割が登校する。

ウ 家庭と協力して今度は登校刺激をいっさい加えない。

登校拒否の程度が強まったり、心気症的な症状が激しくなったり、攻撃的になるようなら、家庭と協力して、今度は登校刺激をいっさい加えない。学校のこと、勉強のことについて一言も言わず、本人の心の安定をはかる。

エ 本人、親との面接を続ける。

苦しみ、悩んでいる子供の心を、自分の心として感じとるように親に要請していくと同時に、子供の気持や行動の変化を細かに観察してもらう。本人とは、雑談や遊びで仲良しになろう。

オ 友人を遊びに行かせる。

遊びだけを目的に楽しくすごせるように、趣味の合う話し相手がよい。学校に誘い出そうとしない。

(2) 中・高校生の対応

優等生の息切れ型、甘やかされ慢性型の登校拒否の事例が多いのがこの年代である。前者のタイプは学校を休んでいることへの罪悪感が強く、友だちや担任と会えない生徒が多い。登校刺激に対しても、反抗や抵抗を強め、閉じこもりがひどくなることもある。したがって次のような対応が望まれる。

ア 学校も家庭も、登校することを全く勧めない。 エ 親しい友だちを訪問させ、話し合わせる。

イ 生活のすべてを本人に任せるよう両親に話す。 オ 学校とのつながりを切らないようにする。

ウ 本人に会えるなら、話を聞いてやる。 カ 親との面接を続け、本人の動きを観察する。

甘やかされタイプは、どのようにして自我の強化をはかるか、自主性を伸ばしてやるか、耐性を強めてやるかということが指導・治療のねらいとなろう。したがって(1)の小学生の対応を基本にしながら、特に、本人と親しくなることで話し合ったり遊んだりして、安心して一緒に居られることが大切である。

Ⅱ 家庭・関連機関に対する学級担任の関わり

不登校が続く、家にこもるようになると担任に会うことを拒み続ける場合が多い。このような時期を経て自立への経過をたどるためには、家庭での対応の仕方が鍵となってくる。しかし、親も学校に行けない子供同様に混乱し、不安な日々を送っている。まず、親の精神的安定を図り冷静に対処していくために、第三者としての相談機関との連携が重要になってくる。次のような事例をとおして担任として、親や相談機関とどのようなかかわりを持つことが有効であるか考えていく。

1. 事 例

事例 1 相談機関との連携……母親の変容により登校を始める （小学校2年生 M子）

(1) 本人とまわりの状況

感受性が鋭く、母の期待を敏感に受けとめ、その願いに沿うような行動をとりやすい。感情の起伏が大きく独善的な面もあり級友が少ない。学習の成績は良く、読書を好む。

父は教員、母は都会育ちで現在住んでいる地域になじみにくく、近隣の人達との付き合いもあまりない。6歳になる妹は明るい性格で近所の子供とよく遊んでいる。

(2) 状況の概要

父の転勤によって4月に名古屋から転校してきた。都会の真中から環境や習慣の全く異なる田舎の学校に来て、人間関係や生活のリズムに適応できなくなり不登校を起こした。また、母親は都会を離れなければならないこの転勤には反対であった。したがって田んぼと山に囲まれた地域とそこに住む人々を嫌悪さえしていた。M子が不登校を始めた頃、口では「学校に行かなければいけない」といいながらもM子が休んで家に居ると内心ホッとするものがあつたようだ。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

母親の不満や葛藤を理解する M子が会うことを拒んでいたため、母親に来校してもらったり、家庭訪問をして何回か相談の機会をもった。M子は担任が訪問してもほとんど話をせず、母親の後に隠れていたので母親との一方的な話し合いになった。母親は「名古屋の学校では放課後はほとんど自由時間になっており、ピアノを弾いたり、読書をしたりして自分の思う通りに過ごせたが、こちらの学校は体力づくりとかクラブ活動とか、子供を一つのかたちの中に押し込めてしまうので不応を起こしてしまつたのだ」と話してきた。

数回話し合いを重ねるうちに母親は「実は自分もこの地域になじまず、付き合いの持てる人もなく、不安な毎日を送っている。また、そのことを主人に訴えても『それはおまえが地域に入っていこうと努力をしないからだ』と叱られる」と言い、「今の状態から脱け出したいとは思ふのだが、地域を好きになれない自分の心を偽ることもできずに苦しんでいる」とも話してくれるようになった。

教育センターでの相談を勧める……母親の変容とM子の再登校 担任はM子が登校できるようにな

るには、母親の変容が必要だと考え、M子と両親と一緒に教育センターで相談を受けることを勧めた。父親は教員であることから、教育センターに相談に行くことをなかなか潔しとしなかった。母親は毎日の孤独な生活から逃れたいのと、子供と毎日家に居るのは自分の慰めにはなるが、M子本人のことを考えると良いことではないと思い、自責の念にかられ、M子と二人で教育センターを訪れた。

教育センターでは、学校・地域から遠く離れていることや第三者的な機関であることから、心のわだかまりが解けるように、母親自身の生い立ちや、結婚してからの生活、主人の転勤がいやで苦しんだこと、学校への不満、田舎の生活にどうしても溶け込めない切なさ等を吐露してきた。三回目の相談の後、こんなに胸の内を吐き出したのは初めてだったと笑顔で帰っていった。二ヶ月ほど経つうちに、自分の苦しみの原因を主人の転勤や学校の理解のなさ、また地域の人々の無神経さ等のせいにしていたが実は、自分の生き方そのものから苦しみが生じているのかも知れないと洞察するようになっていった。

母親は「M子が学校に行けないのは、自分が今の学校を嫌っていることも原因の一つかと思う。学校を嫌っているのは、接触を故意に避けているからで、自分がもっと心を開かなければ」と話してきた。教育センターではこのことについて担任と連絡をとり合い、担任の方から母親と会う機会を増していくよう要請した。その結果、母親は担任とはもちろんのこと、担任を通してクラブ活動の顧問や生徒指導主事、校長等とも心の触れ合いを持つことができるようになった。

この頃になるとM子も家で担任から渡される課題に取り組んだり、担任の訪問を笑顔で迎え、トランプ等をして遊ぶこともあった。7月に入って母親が担任を訪問する際、一緒に行こうという驚いた表情はしたが嫌とはいわなかった。学校に行き教室には入れなかったが、保健室で養護教諭と過ごすことができた。翌日から途中まで母親が送って行ってはいるが一人で校舎に入れるようになった。

(4) 考 察

M子は転校をするまでは、全く手のかからない「良い子」であった。両親の教育は、幼児期から徹底され、M子に強くいったり指示をしなくても自ら両親の願いを先取りして行動できるようになっていた。

それが、大きな環境の変化によりM子のもとより母親も強いカルチャーショックを受けた。母親の内面的な混乱や地域の人達との交流を拒否する態度が、M子にも強く投影され不登校へと陥っていった。

父親は、自分で求めた職場なので新しい職場で張り切って活躍しており、妻の苦しみは理解し難いものであったようだ。母親は教育センターで、気兼ねなく、学校のこと、家庭のことを相談できるようになり、心の中を吐露しつつ、自分の内面を素直に見つめるようになっていった。また、家にこもっていた生活からボランティアの仕事を見つけるまでに変容した。この事例では、担任が不登校という現象の事実のみに捕らわれることなく、対応の視点を的確に把握した上でM子や母親の悩みを共に考えていく姿勢をもっていたことが、M子の再登校への力を育んできたものと考えられる。

事例 2 親や子供の気持をとらえることができない担任

（小学校5年生 H男）

(1) 本人とまわりの状況

H男は、級友の前では口数の少ない、おとなしい子である。あきやすく、手間がかかることを面倒が

る。学習内容の理解は、どちらかというとやや遅い方。2～3人の友達がいるが、他の級友とあまり積極的に交流しない。両親は共働きであって、H男の教育は幼児期から祖父母に任せきってきた。祖父は厳格な人であり、祖母は子供の教育に過保護、干渉過多であった。母親は静かで、優しい。父親は、強い祖父とは対称的でおとなしい。両親、弟、祖父母など7人家族である。

(2) 状況の概要

9月初め、腹痛を訴えて学校を休み始める。学習への意欲が目立ってなくなる。H男は、ある日グループ学習の時に級友に質問したところ「こんなのが分らないのか」と逆に言われ、落ち込み、腹痛を訴えて断続的に休み出した。通学班の上級生に通学途上、いじめられたことも何回かあった。10月初旬、頭痛などの不定愁訴を訴え、登校を強く拒否する。小児科医は、器質的疾患はないと診断した。11月に入って、不登校状態が連続するようになった。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

時機を失した家庭訪問 担任が親から「顔を見せてもらえればありがたい」と要請を受けたのは、H男の休みが始まってから2か月後のことであった。担任は、H男の気持が落ち着くのを待とうと思っていた。親の申し出に応じた担任は、H男に向かって「なぜ、出てこないのか、先生の立場も考えてみる」と強い調子で詰問した。横で聞いていた祖母は、その強い口調と態度に驚いて寝込んでしまった。担任は、その後時々訪問するようになったが、H男は玄関で担任の訪問を察知し、担任から逃げ回る。両親は、命令すれば人間が動くと思っているように感じとれる担任の考えや態度に首をかしげた。

気持が伝わらない対応 「学校に行きたいけど行けない」と、H男は母に自分の気持を語ったことがあった。担任の最初の訪問後である。H男は、12月末、担任に年賀状を出した。新年に入って返事を待っていたが、担任からは年賀状が届かない。H男は、「先生は俺を無視した」と家族に話した。母親は、担任に電話でH男の生活や指導の在り方を尋ねた。しかし、担任の返事はいつも「はい、はい」の応答のみ。相談しようと思っていた両親は、その気持が次第に消えていくことを感じた。

圧力を感じさせる叱責 「家の人に甘えて休んでいると、特殊学級にやる」——休みが続いて4か月、状況の変化が見られないH男と祖母を前に、訪問した担任は叱った。翌日、H男は頭がおかしくなったのではないと思われるくらいに落ち込んだ。両親は、H男の様子を見て担任の指導に反発を感じた。担任は親や家族が甘やかしているように言うが、いつまでも登校できないH男を前に、両親は担任や学校に申し訳けない気持でいた。このような子供に育てた親の責任を深く反省し、何とかしなければならぬと悩む毎日である。しかし、両親はどうすればよいかわからず、いらだちさえ感じていた。

その一方で、担任の対応にもう少し「子供に目を向けた、手の届いたものであってほしい」という気持が起きた。そして、担任の対応を見て、父親は自分の中にあるモヤモヤがふっ切れ、“開き直った”気持になった。担任に対するやりきれない気持とともに、自分が何とかしなければならぬと強く感じるようになった。両親は、H男のことで担任とじっくり話をしたいと思った。しかし、自分から担任に心を開いて近づくことに、もう一つひっかかるものがあった。

(4) 考 察

登校拒否児には、担任と親の二人三脚の対応が欠かせない。

本事例の場合、担任として重要なことは、まず親の話から親の気持を理解し、受容する態度をもつことである。「顔を見せてもらえばありがたい」——これは親の切実な訴えである。弱い立場にいる親から出た、担任に対する悲痛な声である。担任がその気持を十分に理解してくれなかったという親の気持が、以後担任に対し、否定的な気持をもたせたと考えられる。

「家の人に甘えて休んでいると……」という担任の言葉は、変化しないH男に対するいらだちから出たものであるかもしれない。しかし、問題の本質を捕えた言葉ではない。それゆえに、圧力を感じさせる、感情的なこの叱責は結果的に、担任に対する両親の不信を一層深くするものになった。圧力は、人の心を固く閉ざしていく——この事例はそれを如実に示している。

事例 3

長期にわたる不登校生徒の新担任としての取り組み

（中学校1年 I男）

(1) 本人とまわりの状況

I男は、内気で引込思案な面があり友達に対しても遠慮がちである。また自分が人にどう思われているのか気にするほうである。父、母、兄の4人家族の共稼ぎ家庭であり、母親は勤め関係で朝が早く帰りが遅い。したがって父親が母親がわりをつとめ、I男が幼児の頃から母親以上にきめ細かに面倒をみてきた。兄弟の仲は良く兄にときどき相談をしている。また近所には同級の友達が一人いる。

(2) 状況の概要

小学校5年の1月に風邪をこじらせ肺炎を患う。3週間の欠席後再登校するが学級の友達となじめなくなり登校をしぶり始め、間もなく全く登校しなくなる。両親は地区の専門機関に相談に行き「無理に連れ出して直ったケースがあるのでやってみたらどうか」といわれ、父親は1週間位強引に学校に連れていった。ところがあまりの切なさにI男の体が硬直状態をおこすようになり、見るに見兼ね家で様子を見ることにした。ところが不登校が続いてしまい親の「中学生になったら登校してくれるだろう」という期待も裏切られ、当教育センターを訪れた。現在のI男は不登校以外は全く普通に生活している。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

中学校に入学したが1日も登校しないI男について、担任は、小学校からの継続であるので登校は無理であろうと考え、家庭訪問もせず電話さえもしなかった。その事について両親は次のように語っている。「教科書を受け取りに学校に行った時、初めて担任の先生に会いI男の事を相談した。その時はぎこちなく、登校拒否のことをあまり良く知らないのかなと不安な気持であったが、今はもう見捨てられたようだ。こちらから『訪問してください』とも言えないし……」と切ない気持をもらしている。

担任として、今できることは何か

担当相談員は、I男の現状や両親の取り組みを担任に伝えると同時に、今後の方針について相談する。担任は様子を見ながら次のことを徐々に実践していった。

- ・母親とのラポートづくりとI男の現況把握のための家庭訪問を続けた。母親も勤めをやめ協力した。
- ・I男への接近を試みるため、学級写真や学級の生徒の手紙等をとおして、学級の様子を母親からI男

に伝えてもらうことを繰り返す。I男も担任に興味を示し、帰る姿を窓から眺めるようになった。

・I男が電話口に出る可能性のあるのはどんな時かを母親に観察してもらい、そのチャンスを母親の協力を得て計画し実行していった。1回目は「〇〇中学の〇〇ですがI男君いますか」という担任の声に対し電話に出たI男は、「いません」と電話を切ってしまう。2回目、「I男君、おはよう……無言……お母さん居るかな」「いない」「そう、じゃあまた電話するわ、お母さんによろしくね」と切る。担任は母親から電話に出た時のI男の気持ちを聞きながら、電話をする機会と内容を検討していった。

I男に直接会うための試み

担任はI男の近くに住んでいる同級生を遊びに行かせ、母親にその時の様子を観察してもらう。それをもとに遊びに行く生徒へ示唆を与えながら、徐々に外で遊ぶような方向にもっていった。そしてついにI男は学級の生徒二人と日曜日に魚つりに行く約束をしたのである。その報告を聞いた担任は、時間と場所を確かめ、当日散歩を装い魚つりの現場に顔を出した。担任にとって初めてのI男との対面であった。担任は学校の話をしきりせず、1時間程一緒に遊んで別れた。このことがきっかけで担任とI男の面接が続いていくのである。

(4) 考察

不登校は小学校からの継続であり、しかも中学校の入学式にも登校できない生徒を受け持った担任が母親や当教育センター相談員と連携を図りながら真剣に取り組んだ。その結果入学当初、どうにもならないとあきらめていた担任は「私にできることはなんだろう」と常に前向きに検討する気持ちに変化していった。そして、この担任の真剣な取り組みは母親の気持ちを大きく動かし、母親に次のような変容をもたらした。⑦ 父親とのかかわりが強かったI男の生活から、これまでできなかった母親の役目を果たすため、勤めをやめ家事に専念したこと。⑧ 細かにI男の行動を観察し、気持ちの変化も捕らえることができるようになったこと。⑨ 担任や相談員を信頼し、十分な連絡を取り合うことができたこと。

以上のような母親の変容は、担任にとって大きな助けとなった。また母親からの情報は、次の指導方針を計画するための重要な決め手となった。実践内容は目新しいことではないが、本人の態様にそった担任と母親のかかわりとそのタイミングの良さが、結果的に担任とI男の初対面のチャンスをもたらし、以後I男との面接が継続していくのである。

事例 4

担任から登校を強く迫られ苦悩する親子

(中学校1年生 J子)

(1) 本人とまわりの状況

J子は口数が少なく友人も余りいない。体はやや弱い方でかぜを引きやすく、登校しなくなってからは特にイライラが続く、感情の起伏も激しくなった。

父は自営業であり、子煩悩で、J子は父にべたべた甘えることが多い。母は近くの工場に勤めておりやや無口で弱々しい。妹が一人おり、祖父母が同居している。

(2) 状況の概要

J子は小学校6年生までは学校を嫌がることなく、病気以外では学校を休むことはなかった。中学校に進み陸上競技部に入ったが、身体的な理由から部員に嫌味を言われたり、練習も自分の思うように

できなかったりして部活動に出るのを渋り始めた。そして何かと体の不調を訴えて遅刻・早退を繰り返すようになり欠席する日も増えていった。2学期になるとさらに遅刻や早退、欠席が多くなり10月中旬から全く登校できなくなってしまった。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

励ましと強い指導……心を閉ざす J 子

1学期の遅刻・早退が目立ってきた頃、担任は J 子に努力をすれば必ず選手になれるからと励ました。また、陸上競技部の顧問とも連絡を取りあって J 子と部員との関係改善を強く要請していった。しかし、励まして力をつけてやろうとすればするほど無口になっていき、部員からも J 子だけが甘やかされていると批難されて益々孤立してしまった。

両親は担任から「部活動に積極的に参加し、集団生活の中では我慢しなければならない場合もあることをしっかり教えてほしい」と言われ、父親がそのことを繰り返えし J 子に話していた。

また、不登校の始まった頃「甘やかさないで学校に連れてくるように」とも言われ、強く叱ったり時にはぶつこともあった。以上のような経過をたどるうちに J 子の態度はかたくなになり、決して心を開こうとしなくなっていった。

学校と相談機関の意見の違い……両親の困惑と荒れる J 子

両親は思い余って町の相談機関に援助を求めた。そこで、今までのきつく叱る態度をやめてしばらく静観した方が良く指導を受け、家庭でも話し合って両親や祖父母は J 子に学校のことは話さないことにした。J 子はしばらくするとイライラする態度が少なくなり、家庭内では笑顔を見せるようになった。しかし、まだ、登校はできない状態が続いていた。

不登校が1か月を過ぎた頃、学校から父母に呼び出しがあり、校長、生徒指導主事、担任から家での対応についていろいろ聞かれた。父親がこの頃笑顔を見せるようになってきたことを話すと、担任から「それは、甘やかして、学校に行かなくても良いと言っているから楽々しているのではないか、小さい時からしつけのきちんとできていない子供であるから、このままでは良くならない。もっと育て方にすじを通した方が良い」といわれた。また、校長は「あまり休むと進級できなくなるので1日に30分でもいいから学校によこすように」と話してきた。親としても、進級できなくなれば大変だと不安になり、それ以後、朝になると無理してでも学校に行かせようとするようになった。父親は自営業なので、朝仕事の準備をした後、J 子を無理矢理車に乗せて学校に連れていった。J 子は校門から玄関に入るが父親の車が見えなくなると、すぐに校舎から脱け出し近くの公園で時間を過ごし、父親の目につかないようにして家に入り、2階の自分の部屋に閉じこもるようになった。

このことが3日続いた後、J 子は朝車に乗せようとするやと激しく抵抗し、大きな声で「私が家に居なければ一番いいでしょ!」とわめいて父親の手におえなくなってしまった。

両親は為すすべもなく途方に暮れて当教育センターを訪れた。

(4) 考 察

J 子は入学して間もなく部活動に出れなくなった時、学校でも家庭でもしつた激励を繰り返した。そのことが J 子の心の傷を深くしていったようだ。J 子が不安になっている心の内を聴いていく方法はなかったのであろうか。無口になっていくことは自分が周りから分かってもらえないいらだちと不信の

表れとも言える。

町の相談機関の指導を受け漸く笑顔が見えるようになっていた時に、学校から強い指導を迫られ、注意を受けた結果、両親はJ子が進級できなくなるかも知れないという不安に陥り、逃れようのない切ない心境に追いつめられていった。そのことから両親は学校への不信を募らせ、それがJ子自身にも反映し、益々不安定で荒れた状態になっていった。

担任としては、親の不安な気持ちをくみながら、学校の考え方についても理解を深めてもらい、親の揺れる気持ちを支えていくことが大切であると考ええる。

事例 5

学級担任と副任の連携プレイ

（高校1年生 K男）

（1）本人とまわりの状況

両親は健在で専門学校に通っている姉とK男の4人家族である。父親は、口数が少なく気真面目である。母親はこまごととK男の世話をやく。学校では目立たない方であるが、成績は良い。K男は1年生で取れる資格試験に合格している。担任との関係は、ごく普通である。K男は、小さい時からおとなしく、友達が多い方でないが深く交わる。両親は、何時も姉の活発さをほめ、K男と姉が入れかわるとよいと思っている。

（2）状況の概要

K男は、部活動の合宿が予定されていたが、「合宿に参加したくない」と言い出したのが、欠席のはじまりだった。K男は常日頃友達が少なく、勉強もあまり好きな方ではなかったので、家庭では部活動を一生懸命やるように励ましていた。しかし、部活動がK男にとって負担なら辞めても良いと母親はK男に言った。K男は合宿に参加せず退部したが、上級生から「部を辞めると1年生全体に迷惑がかかるから……」と言われ、再び入部した。その後部活動を続けていると思っていたら、K男は部活動を休んでいた。朝登校しても学校へ行かず街で時間をつぶし帰宅していたことが学校からの連絡でわかった。家ではごく普通に生活していたが、朝になると腹痛や頭痛を訴える。昼過ぎになると元気になり、土曜日の午後や日曜日は何事もないように生活していた。母親は、K男が休み出したのでいろいろ理由を聞いたが、普段からあまり話さないK男の口が益々重くなった。母親は、父親や姉に「K男が登校するように言ってくれ」と頼んだ。父親は、普段あまりしゃべらない方であるが、この時はひどく叱った。K男は、益々口を固く閉ざした。

（3）担任の対応と本人や親の反応

K男が部活動を休み始めた頃、部活の顧問から担任に連絡があった。

担任と副任の協力

担任と副任は、K男が進級できるように話し合った。㊦ K男に登校を強要しない。㊩ 欠席が続くと単位が認定されないことを伝える。㊪ 母親は、K男にこまごま言わないこと。㊫ 担任が家庭訪問できない時や、K男が担任を拒否したとき副任がかかわること。㊬ 教育センターに相談すること。その結果、K男は、担任の訪問を拒否しなかったが、相変わらず登校しない。母親は、イライラしながら、時には「頼むから、学校に行ってくれ」と言った。母親の不安定な気持は、おさま

らず、「K男が早く登校するように言って下さい」と担任にも頼んだ。担任は、小説や旅行の土産を持ってK男を訪問した。副任もK男に会って嫌味にならない程度に話しかけた。担任は、「K男は大丈夫登校するようになるから、イライラしないように」と母親を励ました。

行事を契機に誘いかけ

学校行事を契機に、K男を誘ったがK男は登校しない。困った担任は、部活の友達をK男の家へ行かせた。三日連続の休みに入る前に、部活の友達を朝、K男の家に向えに行かせた。K男は、少し動揺したが「明日から学校へ行く」と言った。K男は、まわりの期待に反して登校しなかった。しばらくK男の欠席が続いた。

母親は焦ったが、K男は登校しなかった。思いあまった母親は、すぐに教育センターに相談に来た。

関係機関との連携

しばらく日が過ぎて、担任から教育センターに依頼があった。相談員は、担任と親に連携のとり方について夫々と話し合った。㊦今までどおりのかかわり方でひき続きやること。㊧母親は、今まで以上に担任の支えが必要なこと。㊨担任は、K男の家庭訪問を続けていくこと。㊩K男の反応をみて、副任からも電話をしてもらうこと。

担任は、創立記念日と日曜日が重なった連休を利用し、K男に電話で誘った。K男は、先生に「僕、学校へ行ってみます」と返事をした。K男は、母にも突然「来週から登校するよ」と言った。K男の登校は、2～3日続き、木曜日、金曜日と休み、土曜日にまた登校した。次の週から少しずつ元気を取り戻したK男は、何のこだわりもなく登校している。

(4) 考察

このケースは、担任と副任の協力がK男の登校を促したと言える。何が原因でK男が登校しなかったのか今でも解らない。K男は勿論言わないし、担任や副任もK男に理由を聞いてもはっきりしないという。登校のきっかけは、学校行事を契機にK男を誘い出したのが成功した。K男にとっていきなり6時間の授業、放課後の部活など、きついスケジュールにならないよう、また、部活をしばらく休ませる配慮をした。事例は、登校に至るまでの過程で、担任と副任の連携でK男を中心に、母親を支えたことがあげられる。また一方では、担任や副任は、学年、教科、部活の顧問など教師間の理解と協力を注いだこと、関係機関と連携したことが良い結果につながったことを忘れてはならない。

事例 6

本人の気持ちを無視した担任のかかわり

（高校1年生 1男）

(1) 本人とまわりの状況

L男は、素直できちょうめんであるがちょっとした事でふさぎ込むことが多い。また姉と5歳離れており、甘やかされて育ったせいか両親に依存する気持ちが強く感じられる。父、母、姉の4人家族で両親は共稼ぎである。父母共にやや神経質な面があり、子供の生活に干渉しやすい。姉は大学生で関東方面に行っているため現在は3人で生活している。

(2) 状況の概要

L男は、先天性の皮膚疾患があり周期的に手足の皮がむけ赤味を帯びる。特に手の指の皮が激しくむけ、においが出てくるのだとL男は悩んでいたが、学級の女生徒に「臭い」と言われたことを苦に登校

しなくなる。中学校1年の時も同じ原因で登校できなくなり養護学校に編入したが、3年進級を機に自分から普通学校に戻りたいと言いだし、もとの中学校に戻り1日も休まず通学した経緯がある。現在不登校を続けているが、規則正しい生活をし勉強もしている。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

病院の紹介と専門機関への勧め 担任は両親の説明やL男の言っていることに納得できず、医師の診察を受けることを勧める。父親は担任の勧めによりL男を病院に連れて行くが医師の診断がはっきりしなかった。担任はさらに次から次へと病院を紹介し、結局、L男は4か所の病院まわりをするはめになった。しかし、結果的にはなんの効果もなく、ただ欠席数が増えるのみであった。それにもかかわらずさらに担任は、私的な機関やカウンセラーを紹介していった。父親も何かにすがりたい一心で担任の勧めに答えてL男を引っ張りまわした。L男の気持はむなしくなるばかりで、担任に対する不信感も募っていった。

休学を迫る担任 担任はL男に登校のきざしが全く感じられないため、わずか1か月半の欠席にもかかわらず、「単位が取られない教科があるため留年になります。休学願いを出して下さい」と父親に用紙を置いていく。父親はL男を無理に納得させ休学願いを書き、直接校長に渡す。ところが校長は、「そんなに急がなくてもよいでしょう。もう少しお互いに努力してみよう様子を見ましょう」と言って休学願いを受け取らなかった。父親とL男は、担任に対しますます不信の念をいだくのであった。

(4) 考察

担任は他機関にL男の治療をまかせてしまい、自らL男とのかかわりを持つととしなかった。また父親も担任に依存してしまい振り回されたようである。あくまでもL男の気持ちにそって援助していくことが望まれる。本事例は、L男の症状から自己臭症と認められる。したがって多くの機関で診察を受けるということは、大人に対する不信と本人の不安を募らせるだけである。関連機関と連携をとりながら、焦らず長期のかかわりを覚悟でL男に接していくべきであると考ええる。

2. ま と め

事例にも見られるように、登校拒否をしている子供を持つ親は、まわりから「親が悪いのだ」と見られたり、「親自身の養育の仕方が悪かったのではないか」と自らを責めたりして、精神的に混乱し、不安定になっている。それは丁度、自分の学級から問題行動を持つ子供が出たとき、他の教師から自分の学級経営や指導の甘さをつかれ、同僚に反発を感じたり、問題行動を持つ子供に否定的な感情を抱いていく担任の心境に似ていないだろうか。このようなとき、心は揺れ動き、困惑し、誰かに救いを求めたい気持ちになっていく。登校拒否児を持って精神的に不安定になっている親に対して、相談機関の援助を求めながら担任としてどのようなかかわり方をしたらよいかを次にあげていく。

(1) 家庭（親）との協力関係をつくる

ア. 親を理解し、支持的になること。

。 悩み迷い不安定になっている親を理解する。

親は、不登校が長引くと、どうしたら良いのか困惑し、情緒的に不安定になっていく。担任や子供の友人を批難したり、逆に子供に哀願してみたり、学校には早く何とかしてほしいと依存的になったりす

る。

- 子供への愛と憎しみに揺れている気持を理解する。

親は、親子としての一体感と登校できない子供への拒否的な感情の相反する気持の中で葛藤している。

- イ. 親への働きかけは信頼関係をベースに進めること。

- 親の話を聴き、その気持を感じとる。

担任が適切であると思っする助言も、親が受け入れるかどうかで適否が決まる。それは親が自分の気持を分ってもらえたと実感し、共に考え合ってくれる相手だと確信したときに受け入れられていく。

- 子供の良い面、可能性をもった姿を見つめ伝えていく。

担任が事実を強く指摘することは、子供のネガティブな面の強調となり、親は自分が責められているという気持を抱き、子供を否定的に見てしまう。子供の可能性に注目することにより指導への手がかりが出てくる。

- 担任が自らの情緒の安定を図って働きかけていく。

担任は親と同じように苦しみ悩む。しかし、ゆとりを失った状態では親の気持を理解することもできず、問題を親の責任へと転嫁して親との関係がまずくなる。心が安定していると、親の困惑に共感でき信頼を基にした協力関係ができてくる。

- ウ. 子供の心理、過程（経過）予後についての情報。

- 不登校は単なるわがまま、甘えでないこと。子供自身が最も苦しんでいること。
- 回復していく過程が長期化する場合が多いので、あせらないで対応していくこと。
- 「学校に行きなさい」と強制しないこと。
- 家庭での生活は、反社会的な人間としてのルールに反すること以外は、原則として子供の意志、自主性にまかせること。
- 長い過程を通るにしても、将来への希望は捨てずに「信じて」待つ姿勢を保つこと。
- 子供のよりよい変容を促すためには、親の協力と親自身が自分を素直に見つめ、変容していくことが大切であること。

(2) 相談機関との連携を密にするために

- ア. 担任は、親に紹介するときは慎重にしかも自信をもってすすめる。

親が、学校は子供を手に負えないから見捨てたという感じを抱いたらよくならない。また、親にとって相談機関は未知で不安な場所でもある。

- イ. 担任は相談機関と情報（資料）交換を密にし、双方がより真実の子供の状態像をつかんでいく。それを基に相談員、担任、親、級友等が有機的によりの確な対応ができるようにする。

- 情報の中で個人のプライバシーに触れる部分は慎重に対応する。

- ウ. 担任（学校）としての指導方針を持って相談機関と協力していく。

- 相談機関にすべてを任かせてホッとするのはなく、担任としてはどの部分を受け持ち、相談機関には何を依頼したいのかを確認し合ってすすめていく。

Ⅲ 学級、学校における取り組み

- ・ 学級担任は、登校拒否児が長い閉じこもりから動き出し、再登校や新しい進路選択をしようとしている時、学級や校内体制にどのような働きかけをしたか。
- ・ 学級担任が働きかけた結果、登校拒否児がどのように反応したか。

以上、二つの視点から、校種別に6事例を掲げた。学級担任が、この時期に学級や校内体制への働きかけ方がいかに大切であるか参考になれば幸いである。

1. 事 例

事例 1

級友との関わりをとらえて登校につなげた学級担任

（小学校5年生 M子）

(1) 本人とまわりの状況

幼児期から人前では「無口な子」で、人見知りの傾向が強いM子。家では元気で、時折大きな声で妹と口論する。保育園時代には近所の子と遊ぶことがあまりなかった。M子は体が大きいですが、静かで気が弱い。気短で依存的、陰気な所があるというのが母親の見るM子である。勉強は嫌いでない。父母に叱られると、「私なんか、かわいくないんだろう」と泣き出すことがある。

(2) 状況の概要

M子は、10月中旬、男子にいじめられたことがきっかけで不登校になった。女子の中には、M子をかばう者がいたが、M子は担任に注意されて気持ちが沈んだ。母との登校、保健室登校を何回か試みたが、腹痛を訴えていた。10月末には、全くの登校拒否状態になった。いじめた子を含め、男子全員がM子を訪れて謝ったが、「女子がどう見ているかわからない。学校をもうやめる。迎えに来てもらわないでよい」と言ってM子は動かない。学校の紹介で教育センターに親子で訪れたのは、その頃である。担任は、M子とつながりを持つために何回か家庭訪問をし、M子と遊んだ。結局、2学期末まで不登校が続く。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

M子は、3学期始業日の前日、登校の準備をした。しかし、当日の朝腹痛、頭痛を訴え、登校できない。転校をほのめかすこともあった。担任が交換ノートを置いていったが、M子は触れようともしない。

級友と自然なふれ合いを深める試み

登校はできないが、M子は近所の子と遊ぶようになった。担任は、級友とM子とのかかわりがめばえてきたことを感じた。M子の表情が豊かになり、担任が話しかけると、M子は簡単に応答する様子が見られた。M子だけに変容を求める対応を考えてきた担任は、相談員や校長と今後のM子に対する援助について話し合った。そして、かかわり方の基本を次の三点に絞った。

ア 親の理解と協力のもとに、M子の生活や行動、言葉が自発的なものになるように心がける。

イ 級友がしぜんにかかわりが持てる場をつくるように心がける。

ウ 生活や行動の変化を見逃さず、様子を見ながら段階的な登校になるように働きかける。

2月に入って、M子の様子が少しずつ変わってきた。その一つは、近所の友達の家へ自分から遊びに出かけたこと、二つには家の中での遊びが友達への“つき合い遊び”から“自分から遊ぶ”状態になったことである。担任はM子の様子を見ながら、一週間に一度ほどの訪問に変えた。2月末、M子は母親らと球技大会の見学に出掛け、級友とバッタリ会う。級友の誘いに車を降り、自校チームに声援を送った。この話を聞いた担任は、M子が動き出しつつあると思った。親と相談し、M子が学校で級友と遊ぶ場をもたせようと考えた。3月初めの日曜日、M子の遊び友達が学校で遊んでいることを知っていた父親は、M子を連れて学校へ遊びに出掛ける。体育館に入って跳び箱を練習した。級友と球技を楽しんだ。たまたま、グラウンドに同じクラスの男子が遊びに来た。一瞬、M子は緊張してしゃがみ込んで男子の様子を眺める。M子をいじめた子供達である。ところが、男子からミニバスの試合を申し込まれ、M子は試合に加わって楽しんだ。

この頃になると、母親は担任の対応に気持も落ち着き、余裕をもってM子を見れるようになった。

その後、M子に再登校の動きが出てきた。親と校長室を訪れ、その翌日は「6年生を送る会」でステージに上がって級友と歌う。1日の休みの後、再び登校した。担任は、M子と話しながら無理のない程度に登校できるように心掛けた。校長はM子の家を何回か訪れた。また、学校で両親と2回の面接を行い、担任の話にも耳を傾けた。

6年生の4月、M子は最初の週、3日登校した。しかし、次週は疲れたらしく、1週間休む。第3週より再び登校し出し、毎日登校するようになる。ある日、校長は職員室の入り口で挨拶する声を背で聞いた。M子である。校長の問いかけに、M子が応答した。校長は、再び驚いた。

(4) 考 察

本事例は、人前で自己表現することに何となく不安を感じる場面緘黙傾向のM子が、級友のいじめに遭ったことを契機に学校場面から逃避したことによる登校拒否である。

M子が再登校するためには、級友との人間関係をととして自己信頼感を育てていくことが回復期にとって重要であった。この点から考えると、対応の良かったこととして次の二点があげられる。

ア 学校を利用して級友とM子の交流の場を設けたこと

親と連携し、M子と級友の遊びの場を学校に作ったことは、立ちなおりに向かっている段階のM子に効果的であった。気持が外に向かい、級友との気持の交流に少し自信を持てるようになっていたM子であるが、学校という場は越えにくい一つの壁である。学校での遊びの中で、弱い自分を克服し得た自信がその後の登校につながったと思われる。この段階までのM子と級友とのかかわりを大切に見守り、育ててきた担任の学級経営の努力や親の努力が、効を奏したといえる。

イ 校内体制でM子への取り組みを進めたこと

登校し始めたM子にとって、級友や先生が自分をどう迎えてくれるかという不安が大きかったと思われる。校長、先生が、紙友達の受容的態度がM子に感じられたからこそ、M子はスムーズに再登校できたのであろう。M子の再登校は、断続的な登校や1週間の休みを焦らずに待つ担任と、それを支えた校長や他の職員との連携の成果である。

事例 2

学級に引き込むために性急な対応をした担任

(小学校4年生 N子)

(1) 本人とまわりの状況

N子は人に対する感受性が強く、引っ込み思案で優しい。家では気に入らないとカッとして、気持ちが
おさまるのに時間がかかる。幼児期から近所の子と遊ぶことが少なく、登園を嫌ったこともある。自営
業の家族の中であって、幼児期は主に祖母に育てられた。母親は、周りに対する気遣いがあって思い通
りの嫌をしったり、甘えさせたりすることが十分でなかったと話している。

(2) 状況の概要

4年生の新学期、推薦されて学級委員になったN子は、やりたくないと言口に出していた。N子は初めて入ったクラブに友達が少なく不安を感じ、担任の指導で別のクラブに入る。6月の体育大会後、前日に登校準備をするが、朝になるとうなだれ、登校できない。11月頃までは、1か月に数日～10日程休む日が続く。その後は全く登校しなくなる。訪問する担任とはほとんど話さない。5年生になって新担任が訪問。訪問2回目から、N子は担任とバドミントンなどで遊ぶ。近所の子と時折、一緒に遊ぶ様子が見られ、N子が自ら図書館へ出掛けるようになった。夏休みに、ラジオ体操に出るまでになってきた。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

以前には車で街を通る時、外の人に見えないように体を伏せていたM子は、7月に入ると大勢の人がいる所でも隠れようとしなくなった。この話を母親から聞いた担任は、N子が人と会うことに抵抗がなくなっていると感じ、夏休みを利用して学校でN子と級友との交流を深めようと考えた。

級友の積極的な歓迎

級友の積極的な歓迎

8月末、担任はN子と一番仲のよい子を迎えにやった。N子はその友達と登校した。教室には学級全員が集合していた。初対面ということで、学級全員が自己紹介をし合った。N子は恥かしがる様子もなく、堂々と挨拶する。その後、級友は交互にN子の所にきて、N子に話かけた。担任は、N子を温かく迎えてやろうと事前に学級の子供に指導しておいた。自己紹介の後、体育館で遊んだ。翌々日、担任は少しでもよいからとN子に登校を呼びかけたが、N子は家を出ようとしていない。前回に、「友達が大勢いたので疲れた」と言うのである。8月末日、友達が迎えに行くと、学校へ遊びに出かけた。しかし、9月の始業日から担任がN子を迎えに行ったが、N子は玄関から出なかった。「まだ、学校に行けない」と、N子は母親に話した。親は、担任から登校への強い指導を求められていたが、N子の状態からそれに踏み切れなかった。

大勢の誘い

大勢の誘い 10月の作品展の前日、友達が迎えにN子の所へ行くと、N子は「行ってきます」と言
って作品を持ち、登校した。再び級友と遊ぶようになったN子を知って、担任は12月の「お楽しみ会」
にN子を参加させたいと考えた。20人程の級友が、担任の指導でN子を訪問した。N子は、どうしてよ
いかかわらず、泣きべそをかいた。2～3日後に担任が訪問するが、N子は隠れて会わない。担任は学
校に戻り、午後、2人の級友をN子の家へ行かせる。N子は連れ出されるようにして、家を出た。

親は、2学期の終業式当日は登校できるかもしれないと思い、級友の迎えを頼んだ。しかし、N子は「行かない」と床を離れない。そのまま、3学期末まで登校しなかった。

(4) 考 察

学級全体で不登校の子に積極的にかかわろうとする学級担任の意図や対応が、必ずしも登校に結び付かないことがある。本事例は、そのことを示している。

N子の場合、突然の学級の積極的な対応が、N子には負担に感じられたようである。N子は級友の前では堂々として見えるが、内心、周りに対する大変な気遣いが働く。少ない友達との交流を重ねてから大勢の級友の何気ない歓迎が、N子にとっては気楽で動きやすかったのではないか。

休んでいるN子にとって、大勢での訪問は疲れる。心の準備がないN子には、押し迫られ、強引に引き出されるように感じられたようである。N子は、回復に向かい気持ちが動いていたことは確かである。もう一つN子の気持ちを思いやるとき、「学校へ早く登校したい」という気持ちと、「早く登校したいけど、何となく行けない」気持ちを汲んでやることがあって良かったのではないか。

例えば、N子が登校すれば、そのまま普通に登校できるとは限らない。今までと違ったリズムに合わせるため、かなりのエネルギーがいる。2～3日登校しては、休み、また登校しながらだんだん自分のペースをつかんでいく場合が多い。

焦るあまり、担任や親の性急な、励げますが、子供になるべく負担をかけないよう配慮することがこの時期の大切なポイントになる。友達の誘いかけ、訪問の人数、担任の訪問等、特に一端再登校した子供が、休んだときの対応は、家庭とよく連絡をとり、子供の反応をみることが大切である。

事例3 不登校生徒を包み込んだ学級の取り組みと学校の指導体制

(中学校3年生
P子)

(1) 本人とまわりの状況

かなり肥満体のP子は、幼児期からの皮膚炎もあってか手足を出すことを嫌がり、体育の授業を好まない。小学校の時に良かった成績も、現在は中位である。級友と表面上は明るくつき合っている。友達には少ない。父親と何でも話すが、「お母さんは私の気持ちをわかってくれない」と母親には不満を感じている。両親は早期から夜遅くまで仕事に出掛け、子供達の生活にやや放任的。姉は受験勉強に熱心、兄は勤めと家族がそれぞれの生活をしている。これらのことがあり、P子は食事などの家事をよくする。

(2) 状況の概要

小学校時代、中学校1、2年生と全く休むことがなかったP子は、3年生の4月になり腹痛を訴えて断続的に休み出す。5月のある日、部活に参加しなかったP子は自宅で自らの手首を傷付ける。担任の家庭訪問で事なきを得たが、P子には心の傷として残った。担任は週1回家庭訪問し、P子の話に耳を傾けたり、学校の話をした。しかし、P子の話からは不登校の明確な原因になるものがつかめなかった。時折登校するが、熱が出て保健室で休む。養護教諭には、担任に話さないことも話していた。学級の同じ生活班にいる一人が励ましの電話を何回かしたが、P子の登校に結び付かない。10月、11月と全く登校しなくなった。多忙な親と担任や校長が何回か話し合った後、11月に教育センターに母子が来所した。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

担任は、P子が学校的话题を嫌がらなくなったのを見て、級友との絆を強くしていくことがP子の登校を促すことにつながると考え、まずそのための援助や学級づくりに努めた。

学級における支え合う人間関係づくり

P子に励ましの電話をかけたS子は、優秀ではきはきしたリーダー的な存在の子であるが、P子は何となくじめないようであった。それを察した担任は、P子と同じ班にいて通学路が同じになるY子を連絡係に頼んだ。Y子も快く応じた。Y子はおとなしい、優しい性格である。P子はY子を迎え入れた。Y子の訪問がきっかけになり、P子は日曜日になると級友と遊んだり、話したりするようになった。12月、1月、2月と次第にP子の登校する日が増えていった。

担任は、P子の不登校が続いた機会に改めて学級の人間関係を見直した。学校では、行事などを含めて大半の教育活動がグループ活動によって進められている。グループのメンバーが互いに役割を果たし合い、支え合うことが目標になっていた。担任は、相手の気持ちを思い大切にすることをとおして人間関係をより深いものにする学級経営に力を入れた。P子の気持ちを考える学級会も持った。これらの努力があって、休みの翌日に登校したP子は、学級にしぜんに溶け込んでいた。

担任を支えた校内の指導体制

11月末を迎えた、担任の悩みはP子の進路のことである。P子自身は、1学期の普通高校希望を変更し、まず就職をして1年後に定時制高校に入学することを考えていた。体を動かす方が好きで就職したいという理由からである。担任は、「休みが続いているけれども本人の成績からすれば、頑張れば別の高校に入れるし、何とかその高校に」と思った。進路決定を急がなければならない焦りが担任にあったが、何よりもまだ、P子自身の考えが揺れている。担任は、早まってはいけないと思い、何回かP子の気持ちを理解しようと面接した。考えが異なる両親にも会った。

そんなとき、担任にとって校長の穏やかな人柄と温かい理解、援助がありがたい。背後から攻め立てられる感じがなく、担任はP子と落ち着いてかかわることができた。校長は、教育センターでの相談を担任に奨め、また養護教諭や女性教師にP子の相談相手になってほしいと頼んだ。父母と面接し、P子に対して両親が温かいふれ合いを心がけてほしいと助言した。P子は、女性教師や養護教諭の所へ自ら出掛け、将来への不安や満たされない学校や家庭の生活などについて話した。二人の教師は、多忙な中でP子の話をうなずきながら聞いた。

P子は、卒業式前3週間、毎日登校した。卒業式には大きな返事をして卒業証書を手にした。就職、定時制高校に通う道を選んだP子は、高校に入学できたことをとても喜んだ。その後、風邪で休んだ以外は、元気に高校生活、社会生活を送っている。

(4) 考 察

P子の不登校には、P子自身の自我の成長の遅れや性格の弱さ、親への不満と愛情承認の欲求などいろいろな要因が絡んでいると思われる。

いずれにせよ、P子を立ち上がらせたものは一つは級友に温かく支えられたことである。二つは、先生方がP子の立ち直りを期待する強い気持ちから出た連帯感である。養護教諭、女性教師はP子の相談員、校長は父母の相談員としてそれぞれの役割を果たしていた。そして、三つは担任の態度であろう。担任が焦る気持ちを抑え、冷静な対応を心掛けることができたのは何によるものであろうか。校長や教師仲

間の支援は大きいですが、何よりも担任のP子に対する深い愛情と誠実な人間性であろう。P子への対応や方策から、P子とともに歩もうとする担任の姿が伝わってくる。P子の心は、担任の態度にひかれたとも考えられる。

事例 4

再登校間際の生徒の気持ちに答えきれなかった担任

（中学校2年 S子）

(1) 本人とまわりの状況

S子は、子宝に恵まれず諦めて10年、やっと授かった一人っ子である。両親に甘やかされわがままに育った。性格は陽気で素直である。父親は自営業を営みほとんど休みがとれない忙しさである。母親も店の手伝いで忙しい毎日であるが暇な時はS子にべったりである。

(2) 状況の概要

S子は、1学期の中間テスト後風邪で3日欠席した。その後級友との交流がうまくいなくなり、登校をしづらくなった。やがて頭痛・腹痛がひどくなり医者診断を受けたが異常はなかった。母親が当教育センターを訪れたのはS子の不登校が続いた1ヶ月後である。母親と相談員との面接を続ける一方、相談員は担任とも連絡を取り合ってきた。S子は夏休みに入って間もなく、これまでの家に閉じこもっていた生活から抜け出し外出するようになる。部活の友達と電話で話すようになる。しかし担任の訪問に対しては拒否し会おうとしない。担任は生徒に人気があり新卒2年目の若い男の先生である。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

担任、両親とも2学期からの再登校に期待したがS子は登校できなかった。

養護教諭に家庭訪問をしてもらう

再登校に向けて動き始めているS子であるが、担任の若さと情熱に圧倒されるためか担任を避けてしまう。母親の観察によるとS子は担任を嫌っているようには感じられないという。しかし担任はS子の再登校を強く望むあまり、自分以外の先生とならS子も会ってくれるのではないかと考えた。学年主任、生徒指導主事と相談した結果、養護教諭に家庭訪問をお願いし、保健室登校から始める方針を立てた。そして全職員に報告するとともに協力をお願いをした。

養護教諭の訪問に対して、S子はなんのこだわりもなく面会し1時間程楽しそうに雑談して過ごした。ところが養護教諭が帰ってしまうと「〇〇先生どうして来なかったのかな」「もう見放されたかな」などとぼんやりしながら母親に話すのだった。夕食後も何か考え込んでいるようであったが突然「明日学校に行く」と言いだし授業の準備を始めた。そして事実だれの手も借りず直接教室まで登校した。

登校してきたら、そっとしておこう

保健室登校に向けてそれぞれ動き出した矢先のS子の登校である。担任はS子を受け入れるための心構えを学級の生徒にまだ指導していなかった。学級の指導はS子が保健室登校をしてからと担任は考えていたのである。この日、S子の登校に対して級友たちのとった行動は、以前に担任が言っていた「S子さんがもうすぐ登校してくるかもしれない。もし登校してきたらそっとしておいてほしい」という言葉に忠実であった。つまりS子に対するいたわりの気持ちをこめた担任の言葉であったが、結果的にはS子を見捨てるような級友たちの行動となったのである。

給食後無断で帰ったS子は母親に「だれも話しかけてくれなかった。一人ぼっちでつらかった。給食も食べられなかった」と話した。S子が家に帰って間もなく担任から電話があったがS子は自室に入り電話口には出なかった。その後また不登校が続いた。

(4) 考 察

担任を避けるS子に養護教諭が面会した結果、S子は事実再登校した。しかし養護教諭が帰った後に母親に語ったS子の言葉の中に、担任への淡い恋心のような思春期のデリケートな複雑な気持ちを感じられる。養護教諭の訪問がきっかけでS子が再登校したのは事実であるが、この時の揺れ動くS子の気持ちを、なぜしっかりと担任は受け止めることができなかったのであろう。担任がもっとリラックスしてS子への接近を試みる工夫がなされたなら、徐々にS子の気持ちが理解でき、しかもS子をしっかりと受け入れる学級づくりもなされ、S子も登校しやすくなっていったことと考えられる。

事例 5 苦悩の果てに新しい進路選択をした高校生の記録

（高校1年生 T子）

(1) 本人とまわりの状況

両親は健在で、特に父親は、T子を溺愛し、幼小时からT子の身の周りについて母親に細かく指図していた。母親は、そのことでいつもピリピリしていた。T子は、我が儘で依存的であり、友達も部活の数人と、幼なじみが一人二人いる程度である。T子の姉は高校時代成績も良く、運動でも活躍していた。T子は、何時も姉が誇りであり、「高校や大学は、お姉ちゃんと同じところに行くんだ」と言っていた。しかし、母親は、T子の希望について、やや背のびしているのではないかと思っていた。

(2) 状況の概要

T子は、2学期末考査の成績がひどく悪く担任に呼ばれた。担任は、T子に「勉強しないと進級できないぞ、おまえの姉さんは優秀だったんだ。こんなことではダメじゃないか」と言った。T子を発奮させるつもりで言ったことがT子にとっては、つらくこたえた。その頃から登校をしぶり出し学年末まで続いた。T子は欠席も多くなったが、それでも学年末考査を受けた。考査の結果は散々であった。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

教育的配慮 担任は、T子が進級して頑張るよう配慮した。

ア 成績査定会議で、T子に頑張らせるから進級のチャンスを与えてくれるよう話した。

イ 学年や部活の顧問にT子の状態を話し協力体制をとった。

ウ 母親には、教育センターで相談するよう指示した。

査定会議の結果は、T子の将来を考え「条件付き」で進級を認めた。一方母親は、教育センターに相談に来たが、父親はあまり積極的な姿勢を示さなかった。

T子は、新学期が始っても登校しない。登校させようとすれば、するほどT子は不安定になっていった。担任の電話や訪問は一斉受けつけない。

親の気持ちを支える T子は、更に昼夜のリズムを崩し、全く非生産的な状態になる。母親は、心配

して、担任に「T子は、気がふれたのではないのでしょうか」と話した。

担任は、このような時期でも冷静に「お母さん、一度しっかり医者に診てもらえば、安心でしょう。それから又考えましょう」と話した。母は、T子にそのことを話すが、T子は受診しない。母がT子の経過を医者に話したら、医者は「T子の様子を少しみてみましょう」と言った。日はどんどん過ぎていくが登校する気配はない。母親も担任も長い時間をかけなければならないことを悟った。担任はふさがちな母親を支えながら、「お母さんがしっかりしなければ……」と励ました。

T子の選択にまかせる

T子の状態が少しずつ変化してきた。昼夜のリズムが少しずつ変わってきたり、自分の部屋の掃除や洗濯などをする日が出てきた。乱暴な言動や赤ちゃんがえりも少なくなってきた。今まで、T子が言い続けてきた「留年も退学も嫌だ。同級生と一緒に卒業したい」と言っていたことから、「お母さん、私の好きなことをしていいんでしょう」とポツリと言った。担任は、この話を母から聞いて、T子は自分で納得した進路をとろうとしていると感じた。数日後T子は、母に「専門学校へ行きたい」ともらした。担任は、T子が長い間苦しみながら、自分で新しい進路を模索し、決定しようとしていることに自分は、誠実に添ってやろうと考えた。その後T子は、学校を辞め専門学校に通っている。

(4) 考 察

・T子は、結局残念ながら再登校はできなかったが、新しい進路を自分で模索し、決定する過程で、担任や校内体制が大きな力となった。特に担任と安定したかわりができた。

・担任が母親の気持を支え、時には崩れそうになる母親を冷静に指示し、判断した力は大きい。

・担任がT子と殆んど会えずにいるにもかかわらず、母親の報告や電話からT子の気持を敏感に受けとり最後はT子に決定させたことがT子の生き方に大きな影響を与えた。

・最後に母親が、「T子が、自分で決めた道なんですから、これでいいんですね」と言ったことが印象的であったが、それにしても母親もよく耐えた。

いかに、担任や校内体制がしっかり本人を支えても、再登校できず、進路を変更した事例である。一人の人間の生き方にかかわる大きな問題におしめない援助をした対応であると考える。

事例 6

協力態勢に耳を傾けず頑に自分の意志を通す担任

（高校1年生 Y子）

(1) 本人とまわりの状況

Y子の両親は健在であり、祖父母、姉二人、Y子の七人家族である。祖父は寝たきりで母親の手がかかる。二人の姉は、県外で学生生活を送っている。Y子は、甘えん坊で人に少しきついことを言われるとすぐ落ち込み、友達も少ない。父親は、Y子が登校を拒否した頃はひどく叱ったが、最近はあまり言わず、母親と一緒につとめて明るく振舞っている。姉達は、帰省するとY子を励ましたり、たまに東京見物をさせている。

(2) 状況の概要

Y子は、中学3年の2学期に重い風疹にかかり、こじらせて1か月近くも学校を休んだ。病気回復後、少し休む日が多かったが、中学は無事に卒業した。心配された高校にも合格した。高校に入ったY子は、成績はよくなかったし、欠席も結構多かった。10月の中間考查の結果が悪かったので担任に呼ばれ「お前は、欠席も多いし成績も良くない。この調子だと進級できないぞ、余程頑張らないと…。」ときつく言われ、がっくりきた。しかし、気をとりなおして登校していたが、12月半ばの期末試験は受けられず、そのまま欠席が続いてしまった。担任は、Y子が休み出しても心配して電話をかけるでもない。学級では、常に「お前達は、自分でしたことに自分で責任をとれ」と言っている。担任は、以前からあまり生徒のことも考えないし、校内でも変り者だという噂が生徒や親の間に伝わっている。特にテストが悪いことと、欠席することをひどく嫌う。

(3) 担任の対応と本人や親の反応

協力の申し出に耳をかさないで独走

Y子は、冬休み明けの1月になっても登校しない。養護教諭や教科担当の先生方から、Y子の単位認定のことや、欠席している理由などの話が出ても一向に様子が解らない。担任は、Y子の家庭訪問をするわけでもなく、級友を訪問させるわけでもない。養護教諭が「私が電話してみましょうか」と言っても、いいかげんな返事しかしない。2月に入り、担任は母親を学校に呼んで「家庭でしっかりY子さんを監督してくれなければ、学校ではどうすることも出来ません。登校しない生徒にどう指導したらいいんですか。もう一週間も休めば単位の認定はむずかしくなります。おまけに2学期末の考查も受けていないし……休学するか、退学するか家で本人と話し合ってください」と言った。母親は、Y子が登校しないことで困っていたが、なかなか担任には言えなかった。しかし、学校に呼ばれ、いきなり休学か退学かせまられ、何とも言えない気持ちで帰ってきた。数日後、担任は電話でY子と話をしようとしたが、Y子は出られず母親がかわって出たら、「もう限度ですから、休学願と退学願の両方を郵送しますから、どちらか決めて学校に送ってください」との話であった。

おどろいた父親は、翌日嫌がるY子を車に乗せ学校へ行ったが、Y子は車から降りられず車の中で泣いていた。父親は、担任に会い、単位認定がむずかしいことを聞かされ、今までの担任の対応に憤りを覚えたが、Y子の不利になると考え、後日休学願を出すことで帰ってきた。

自分勝手な判断

2月の終りに担任は、Y子や親の気持などおかまいなしに電話で「もしY子さんが休学後復学しても、新学期から1つ年下の生徒と一緒に生活することが嫌なら、早いうちに方向転換することも考えて下さい」と暗に退学をほのめかすような言い方をした。そのことを聞いたY子は、ますますいらい「学校は、絶対辞めたくない。先生が辞めればいいんだ」と泣きわめいた。休学願を出して間もないY子に、心の整理をする余裕も与えず追いうちをかけた。学級担任とY子の板ばさみに悩んだ母親は、教育センターを訪ずれた。

(4) 考察

・担任は、学級指導において厳しさとやさしさの調和に欠けている。成績や欠席について厳しく指導していかなければならないが、しかし、生徒が何故欠席するのか、何故学習効果が上らないのか生徒の気持を聞く態度がみられない。親も担任に反発しながら、子供がお世話になっているという気持ちから担任の

独走とも言うべき指導に、何ら言うことができないでいることを担任は解っているのだろうか。

・Y子の単位認定の問題や登校を拒否していること等で、他の先生方が手をさしのべようとしているのに耳をかそうとしない。校内体制でY子をバックアップしようとすることに對して、もし敢えて受け入れないとしているなら、担任の独断でありはなはだ危険である。

・問題の大半が家庭にあるとしても、担任が支えてやることで、ずいぶん生徒も親も楽になり、問題解決への援助になる。たしかに家庭の責任は、家庭でとることは言をまたないが、もう少し人間的な温かさがあつたらと考える。

2. ま と め

登校拒否児は、長い閉じこもりの生活から動き出す。その予兆は、担任が学級に対して新たに受け入れの働きかけが必要となる。また万全の校内体制ができていることを確認して、担任は安心して子供とかわることが出来る。

(1) 登校拒否児にみられる動き

小学生

ア 家から外に出て、親と買物に行ったり、近い所では一人で使いに行ける。

イ 友達と遊ぶことができる。単に遊びに参加しているだけでなく、自分の意志を表明できる。

ウ 親や担任に登校をすすめられてもあまり嫌がらない。

エ 登校の準備（服、靴、カバン、教科書等登校に必要なものをそろえたり、購入したいと言う）をする。

中・高校生

ア 生活のリズムが変わる。起床、就寝、食事時間等家族と一緒にの生活があまり苦にならなくなる。

イ 自室の整理、身の回りの整理、登校の準備等をする。

ウ あまり学校の時間帯が気にならず外出できる。住んでいる地域から離れた街へ買物、映画鑑賞、コンサートに出かける。

エ 学習のことが気になりながらも現実検討ができるようになる。登校するきっかけを学校行事、学年、学期、月、週の始めなどと考えている様子がうかがわれる。

オ 新しい進路選択（転校、休学、具体的な方向を示しながら退学の意志表明）を表明する。

(2) 学級の取り組み

小学生

ア 家から校門まで、保健室まで、あるいは午前中だけ、午後から、放課に登校する。また突然教室まで登校する等様々な場合があるが、学級内で騒ぎ立てないよう事前に指導しておく。

イ 登校拒否児にとって学校生活は、精神的に疲労するので登校したことは、評価しても、過度な評価は、子供に大きな負担になることを指導しておく。

ウ 個人及び班単位の競争は、過度にならないよう指導しておく。

エ 担任が決して焦らない。ごく普通に接し、過度な学習や課題を要求して学習の遅れを取り戻させようとしな。また時間をかければ、学習の遅れは取り戻せることを子供に話してやる。

中・高校生

- ア 登校した子供に、「そっとしておけ」と指導することは大切であるが、反対に疎外感、孤独感を与えないよう、ごく普通に接するよう指導しておく。
- イ 子供は「登校できなかった理由」を聞かれるのが何よりもつらいので、根掘り葉掘り聞かないよう指導しておく。
- ウ 学習の遅れを非常に気にするので学級内で無理のないよう協力体制を学級で話し合わせる。（教科のノートを貸してやる，座席の配慮，行事の班編成，本人を支える級友等）
- エ 教科担当と担任の連絡を密にしておく。

(3) 校内体制

- ア 管理職は、登校拒否に対する理解を日頃から十分にもち、担任が安心して関わられる体制を整えておく。
 - ・出席時数，考査の評価，休学，留年，進級，卒業等に関する校内評価規定の見直しが必要である。
 - ・学級担任，教育相談担当，養護教諭を中核とした組織と学年，学校全体の協力体制を確立しておく。
 - ・学校医との協力が何時でもスムーズに出来て，専門医の紹介等の協力を得られるようにしておく。
 - ・治療機関，相談機関，教育機関と連携して，各機関の治療方針や教育方針と学校の教育方針を十分に協議できる体制をつくっておく。
- イ 学級担任は，独断と偏見に陥ち入らないよう，人間関係を常に円満にし学校内での協力体制をつくっておく。
 - ・家庭の状況をよく把握し，家庭の協力が得られるよう家庭訪問や親に来校してもらう機会を多く持ち，学校に対する理解と協力の信頼関係をつくることが大切である。
 - ・何よりも，学級担任の果たす役割が非常に大きい。

第三章 登校拒否児の早期発見と再登校後の指導

I 早期発見のために

学級担任は、日常の観察や指導をととして、子供が登校を拒否する前に示す何らかの兆候をつかむことが大切である。つまり登校拒否を早期に発見し、早期に対応することが最も望ましいからである。

登校拒否は、主として小学生の問題だった。それは、心身ともに母子分離ができなくて、学校へ行くことに不安を感じるという一種の子供のノイローゼと考えられていた。ところが、これが小学生にとどまらず、中学生から高校生まで更に最近では、大学生にまで増えてきた。大学生の場合は、少し様子がとなり、スチューデントアパシーとか、退却神経症などと言われている。学校に行けないというより、行こうとしない傾向がみられるようである。しかし、ここでは大学生の問題は、触れないことにする。

1. 早期発見のためのチェックポイント

子供の性格や言動から、軽々しく判断したり、決めつけることはできないが、多くの事例から次のように整理できる。

(1) 性格的な面から

劣等感や不安感が強い。心配性。非社交的で自信がない。内気で几帳面。あきっぽい。こだわりが強く負けず嫌い。神経質で罪悪感が強い。以上のような性格を持つ子供に比較的多い。

(2) 身体的な面から

神経性下痢。食欲不振。目まい。ふるえ。呼吸困難。湿疹やかゆみ。頭痛や腹痛。気分不良。吐き気。発熱。以上のような身体状況を訴えやすい子供に多い。

(3) 日常観察からの様子

- ア 特定の教科や決まった曜日を嫌う。
- イ 先生や友達のささいな言動に傷つきやすい。
- ウ いつもおどおどして落ち着きがない。
- エ 無気力で意志表示に乏しい。
- オ 家にいても電話の応待や人の訪問を避ける。
- カ ルーズな生活をおくり、だるそうな行動をとる。
- キ 登校途中で、体調を崩したという理由で帰宅したりする。
- ク 同じ年代の友達が持てない。
- ケ 先生とあまり会話ができないで、一人でつぶやくことが多い。
- コ 時々、理由のない遅刻をすることがある。
- サ 保健室への出入りが多くなる。

以上、早期発見のためのチェックポイントを、子供の性格、身体症状および日常観察の観点からあげてみた。これらは、登校拒否の前兆として多々みられるが、その現われ方は様々であり、それ程容易に判断のつくものではない。それだけに、子供との信頼関係を基盤にどれだけ学級担任が、注意深く見守り、いかに接するかが大きなカギとなる。

2. 登校拒否に対する理解と心構え

小1、小3、小5、中1、中2、高1の学級担任は、子供にとって新しい出会いともいえる。従って、子供は学級担任とよりよい人間関係をつくりあげたいと願う。

- 1) 一人一人の子供の日常観察をしっかり行い、他の先生からの情報も参考にしながら、子供を多面的にとらえる。
- 2) 子供の心身両面におけるその年齢に応じた発達課題の特徴やそれに伴う病理現象を理解しておく。
- 3) 教科担任や、養護教諭、さらに学年の協力体制をはかるため、日頃から人間関係を円満にしておく。
- 4) 学校医と気軽に相談できる体制をとっておく。
- 5) 学校外の子供の様子、家庭の状況を把握するため、日頃から家庭訪問や、電話で連絡をとりあておく。

II 力強く学校生活を送れるようになるために

子供が、再登校したり、進路変更して新しい未来選択をする場合がある。学級担任は、子供がある程度継続して登校しても、なお力強く学校生活を送れるようになるまでかかわらなければならない。

1. 学級での人間関係回復の工夫

- 1) 再登校した子供に、「何故登校しなかったのか」と詮索しないよう指導する。それは、登校拒否児が一番気にしている事柄である場合が多いからである。
- 2) 再登校した子供に対して、「なるべくそっとしておけ」という指導は、本人にとって「無視された」と感じられる場合がある。その点は十分に留意してごく普通に対応するよう指導する。
- 3) 再登校することそれ自体、子供にとって非常に疲れる。しばらくの間、部活や放課後の活動は、馴れるまで本人の意志にまかせるよう配慮してやる。
- 4) 座席や、当番等十分に配慮してやるが、最低限のことはさせる。

2. 学力の遅れをとり戻す工夫

小学生

- ア 学力の遅れの程度を把握し、時間をかければとり戻せることを子供に伝え安心させる。
- イ 過度な課題（質・量ともに）を与えて、子供を焦らせない。
- ウ 個人や班での競争を避け、子供相互の協力体制をつくる。
- エ 不得意な教科に対して、無理のない個別指導も場合によって必要である。

中学・高校生

- ア 教科担任と連携をとりながら、学力の遅れを把握し、時間をかけてとり戻すことを理解させる。
場合によっては、個別指導も必要である。
- イ 単位認定の可否については、レポート、面接などをとおして、認定を弾力的に扱えるよう校内の規定を見直す。
- ウ 不得意教科、特に体育については十分に配慮してやる。

3. 親を支えてやる

- 1) 定期的な面接で、子供の様子を聞いてやる。（月1回程度）
- 2) 親の焦りを極力おさえ、子供の立ち直ったことを評価するよう話してやる。また、憶病になっている親の場合は、普通に対応するよう指示してやる。

4. 転校や進路変更した場合

- 1) 早い時期に転校先の学校と連絡をとる。
- 2) 電話や手紙で子供の様子を聞き、気持を支えてやり次第に自立させる。
- 3) 長期の休暇等を利用して子供に会い、状況を聞いて励ましてやる。

5. 現実検討させる

- 1) ある程度子供の生活が安定したら、学習や進路についてより現実的なかわり方をする。
- 2) 現実的なかわり方の中で最終的には、子供に選択、決定させる。

参考文献

- | | | |
|------------|---------------------|---------|
| 全国教育研究所連盟 | 登校拒否の理解と指導 | 教育研究所連盟 |
| 新潟県立教育センター | 情緒障害児の指導と治療 | |
| 小泉英二 | 続登校拒否—治療の再検討— | 学事出版 |
| 小泉英二 | 「登校拒否」—その心理と治療— | 学事出版 |
| 佐藤修策 | 登校拒否児 | 国土社 |
| 石郷岡泰 | 青年期の登校拒否 | 誠信書房 |
| 詫摩武俊・稲村博編 | 「登校拒否」—どうしたら立ち直れるか— | 有斐閣選書 |